西都市埋蔵文化財発掘調査報告書

第 9 集

# 丸　山　遺　跡

宮崎県営農村基盤総合整備パイロット事業
送水管埋設工事に伴う調査報告

1990・3

宮崎県・西都市教育委員会

# 序

西都市は、宮崎県のほぼ中央に位置した内陸都市で、３００余基の西都原古墳群をはじめとする、多くの古代遺跡が各所に点在しています。

西都原古墳群は、千数百年の長い年月を大自然の中に、今も古代の夢とロマンを秘めて眠りつづけますが、我々は先祖が守り続けてきたと同様に、子孫に語りつぎ継承しなければならないと思います。

本年度発掘調査を実施しました丸山遺跡は、西都原古墳群と同一台地上に在り、この地に農家所得の向上を図るため、送水管の埋設工事が施行されることになりました。

この県営農村基盤総合整備パイロット事業に伴い、西都市教育委員会が、宮崎県一ツ瀬土地改良事務所長の調査委託を受けて事前調査を実施しました。

調査の結果、遺跡及び遺物が出土しましたが、遺物の大半は縄文土器片で、この地域に古墳文化の栄えた以前から人間が居住したことを説明しています。

この報告書は、本調査の調査記録ですが、今後の調査や研究を含めて、西都原地域の古代文化も徐々に解明されてくるものと思います。

最後に、発掘調査を実施するにあたり、ご協力をいただいた方々に心からお礼を申し上げ、さらに本書が、西都原研究資料の一部として広く活用されることを期待いたします。

平成２年３月３１日

西都市教育長　平　野　　平

# 例　　言

1. 本書は、県営農村基盤総合整備パイロット事業・尾鈴地区第12・13・14工区の送水管埋設工事に伴い、宮崎県一ツ瀬土地改良事業所長の調査委託を受け、西都市教育委員会が実施した。丸山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、平成元年１０月１８日から平成元年１２月６日までの間に実施した。
3. 調査関係者は、次のとおりである。

宮崎県一ツ瀬土地改良事務所

所　　長・中　村　政　義

西都市教育委員会

教　育　長・平　野　　平

社会教育課長・清　　郁　男

文化財係長・黒　川　忠　男

調　査　員

日高正晴・西都原古墳研究所長

緒方吉信・同上嘱託

蓑方政幾・社会教育課文化財係

調査作業員……篠原時江・緒方タケ子・黒木トシ子・久保田要子・長谷川クミエ
藤原秋子・野田タツ子・野田サエ子・野田良子

4. 本書に使用した図の作成・本文の執筆並びに編集は、緒方吉信が行った。
5. 本書の遺物実測は緒方吉信が行ない、遺物の分類は日高正晴が行った。
6. 本書に使用した遺構の一部に略記号を付した、次のとおりである。

S…方形状土坑、R…円形状土坑、D…溝状遺構、P…柱穴（ピット）

7. 本書に示す方位は磁北である。
8. 本調査によって出土した遺物は、西都市歴史民俗資料館に保存し展示される。

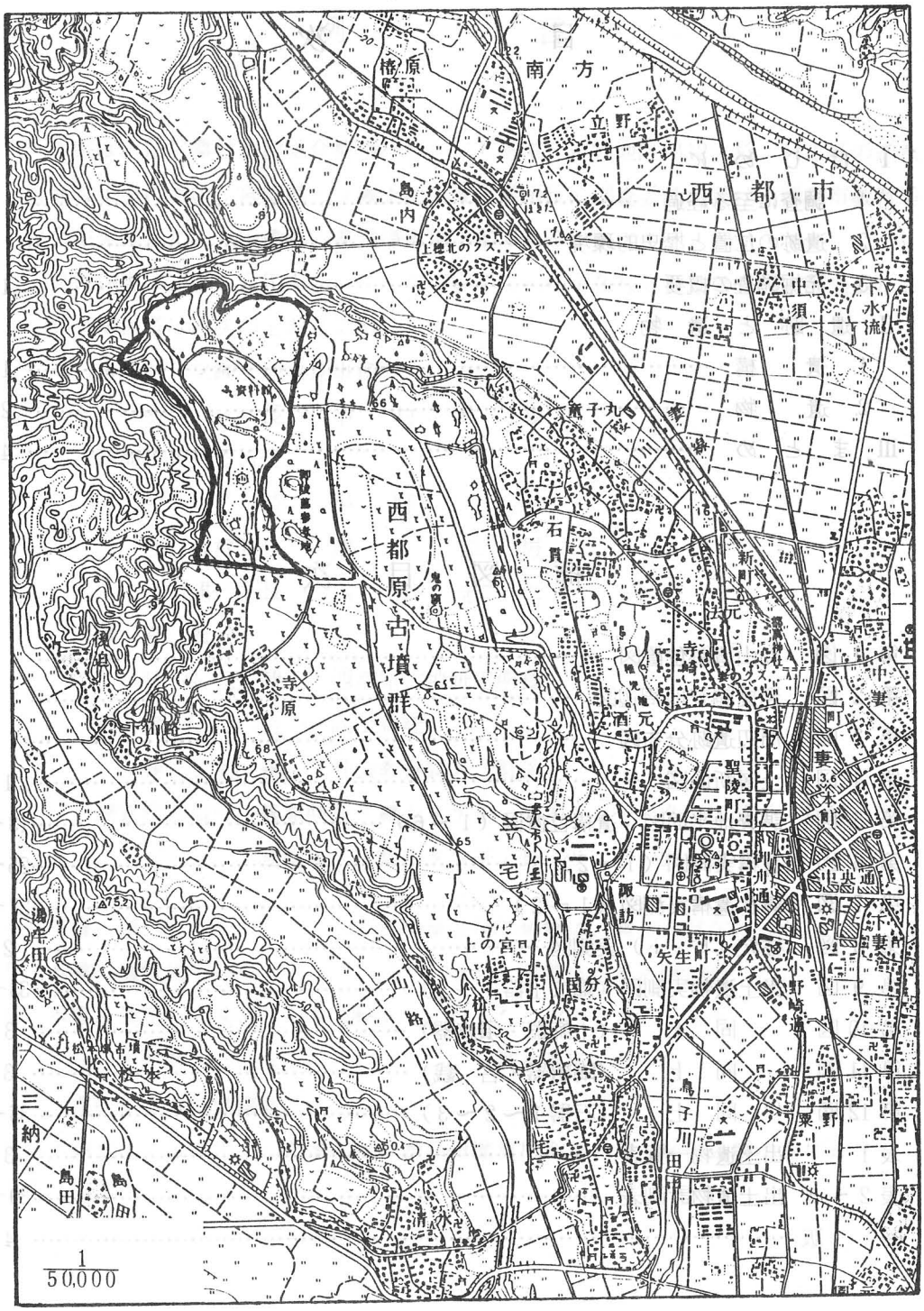
# 目　　次

Ⅰ　は　じ　め　に
1.　調査に至る経過 …… 1
2.　遺跡の位置と歴史的環境 …… 3
3.　発掘調査の概要 …… 10
Ⅱ　遺　跡　と　遺　物
1.　遺　　構 …… 19
2.　遺　　物 …… 29
Ⅲ　ま　と　め …… 43

# 挿　図　目　次

第 1 図　丸山遺跡位置図 ……
第 2 図　発掘調査地周辺図 …… 2
第 3 図　周辺遺跡分布図 …… 6
第 4 図　土層断面図 …… 12
第 5 図　調査地平面図・遺構位置図（1～6）……13～18
第 6 図　遺構実測図（1～2）……25～26
第 7 図　溝状遺構実測図（1～2）……27～28
第 8 図　柱穴（ピット）実測図…… 28
第 9 図　出土遺物実測図（縄文土器1～2）……33～34
第 10 図　　同　上　（土師器・須恵器）…… 35
第 11 図　　同　上　（陶磁器・古　銭）…… 35
第 12 図　　同　上　（石器1～2～3）……35～37
表 1　出土遺物一覧表 …… 38
表 2～6　出土遺物計測表 ……39～42
図　　版 …… 45

第１図　丸山遺跡位置図



# Ⅰ．は　じ　め　に

## １．調査に至る経過

丸山遺跡は、昭和２７年３月２７日・特別史跡に指定された西都原古墳群の所在する台地の北辺に在る。

標高凡そ５０～８０メートルの洪積層台地で、通称西都原と称されるこの地は、３００余基の古墳が点在することから、昔時より神聖な場所とされてきた。

この台地上に、西都市を貫流する一ツ瀬川の水を送り、農業の近代化を望む声は、昭和４０年代前半にすでに起っていた。しかし、歴史的な環境と自然を保護する意味から、この地は一ツ瀬川農業水利事業から除外されていた。

本年度に実施された送水管埋設工事は、昭和６２年度に、一ツ瀬土地改良事務所、西都市役所（耕地課）、並びに県教育委員会（文化課）、西都市教育委員会（社会教育課）の４者会議によって始まり、数回の協議を重ねて後、平成元年１月２４日の西都原協議会でも協議され、総延長1,６００メートルのパイプライン埋設工事が着手されることとなった。

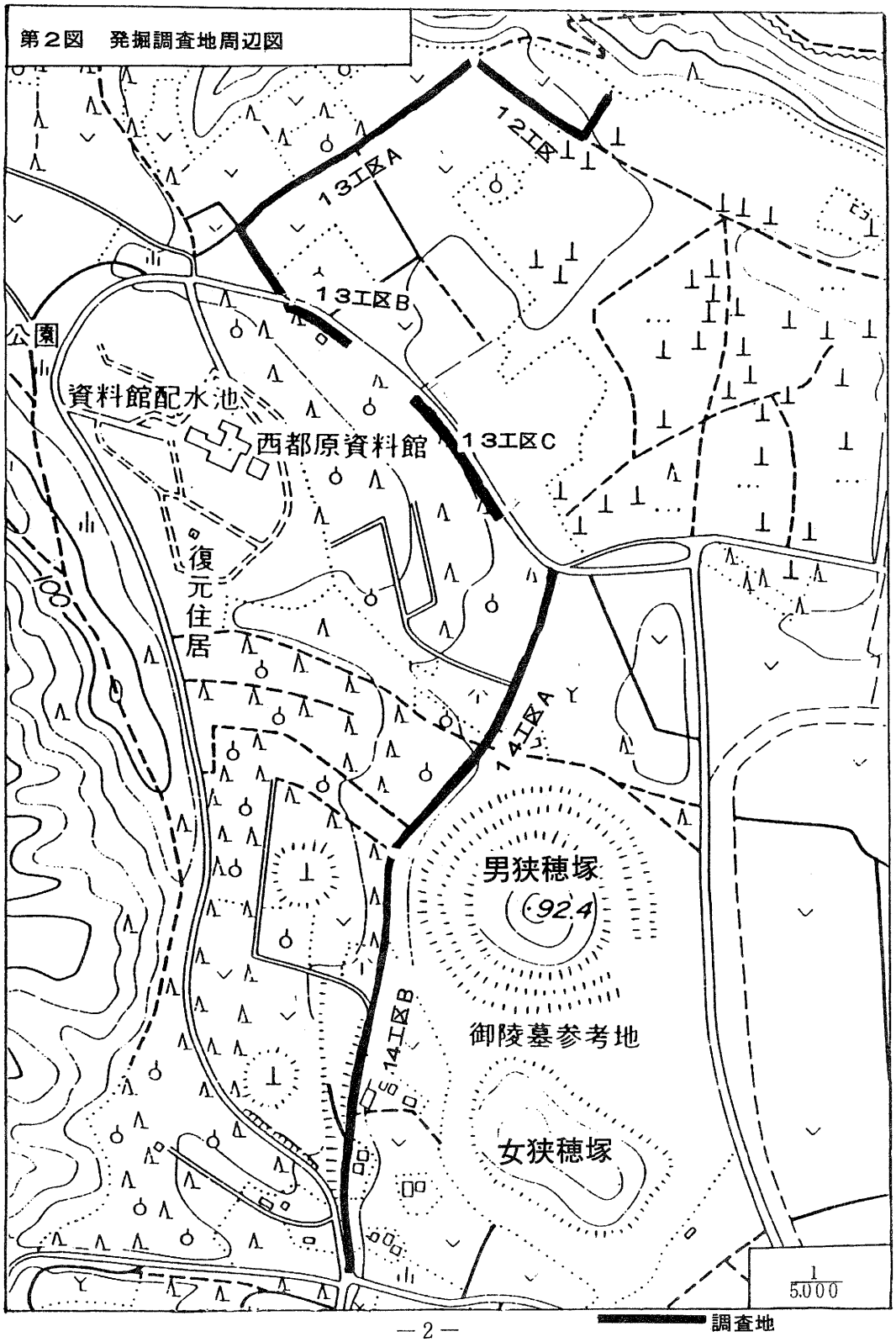
この工事着手に先立ち、西都原協議会に於いても協議されているが、このことは、西都原古墳群の密集した地域等、約５２万㎡が昭和４３年度に風土記の丘として開園した後、西都原の風致保存について、宮崎県知事・宮崎県教育長・西都市長・西都市教育長の４者による確認がなされた。

この確認書の第４項に、「西都原に関して定期的に、又は必要に応じ関係機関の協議会を開き、意見の統一をはかる。」とあり、西都原に関した事例等については、この協議会の意見の統一によって諸事例の進行を見ているからである。

以上の経過を経て、西都原に送水されることが合意に達し、平成元年７月２７日付、宮崎県一ツ瀬土地改良事務所長より、埋蔵文化財発掘通知が提出され、着工前に発掘調査を実施することとなり、記録保存の措置として西都市教育委員会が調査を実施した。

調査は、平成元年１０月１８日に開始し、季節的にも天候に恵まれ、縄文時代の遺物等を得て、平成元年１２月６日にすべての調査を完了した。

第２図　発掘調査地周辺図



## 2. 遺跡の位置と歴史的環境

西都市の中央市街を包含した穂北平野は、西方の背後に九州山地を借景する風光明媚な農耕地帯で、その東端を流れる一ツ瀬川は、山地の腐蝕土を常時運び出し、肥沃した耕地を造出する母なる川である。

中央市街の西方に接した台地には、通称西都原と呼ばれる特別史跡西都原古墳群３０９基が点在し、古代日向国の中心地として華やかな文化の栄えた地域である。

昭和２７年３月２９日、特別史跡の指定を受けた西都原古墳群は、柄鏡式を含む前方後円墳３０基・方墳１基・円墳２７８基の大小古墳で構成され、北限説の地下式墳も10数基発見されている。

台地上の古墳群はまた、４グループに分ける事ができるし、東西凡そ1.5キロメートル南北凡そ３キロメートルの地域に散在する。

さらに西都原台地の中央部には、特別史跡３０９基に含まれない2基の巨大古墳が、明治２８年１２月４日・宮内庁陵墓参考地として指定を受けている。

指定を受けた、宮内庁所管の男狭穂塚（全長２１９ｍ・柄鏡式・帆立貝式説あり）と女狭穂塚（全長１７４ｍ・前方後円墳）は、ともに九州随一の規模を誇り、照葉樹林の森に囲まれ、静寂な陵墓としての環境を保存し、独特な古代史的景観を見せてくれる。

古墳が点在する西都原は、九州山地から穂北平野の南々東に向って突出する岬様台地であるが、南端部の中間台地には奈良時代に建立された一国一寺の日向国分寺跡が保存され、隣接する国府跡の推定地とともに、歴史的な価値の高い地域となっている。

大正元年、宮崎県知事・有吉忠一氏は、同６年まで継続して周知の如く、西都原古墳群中３０基の学術的な発掘調査を実施した。このことは、日向国の古代史解明が当時の中心地であった西都市地域、特に西都原古墳の調査にあるとされたことは、このような素地の中に発生したものと思われる。

このときの発掘調査では、重要文化財指定の舟形はにわと家形はにわ（別名子持ち家形はにわ）をはじめとし、学術的にも価値の高いと評される木棺を覆った粘土槨遺構の発見等があり、国内に於ける古墳研究史上に大きな足跡を残している。

これらの歴史と、西都原古墳群の学術的な価値を永年保存し、顕彰するために行われたのが史跡公園の創出である。

公園事業は、古墳の群集地域東方縁辺部と北辺の環境良好地を合せた５２５,２９０㎡の地域を風土記の丘として整備し、昭和４３年度に開園したものである。

このことによって、古代さながらの西都原の自然環境と古墳群の保護は約束されたが、西都原台地上の風致保存については、昭和４５年２月１３日付、宮崎県知事・宮崎県教育長・西都市長・西都市教育長の４者によって、保護の確認がなされた。

確認書の内容については省略するが、古墳群とその周辺を含めた西都原の風致を永遠に保存しようとするものであり、原則的に現状保存を特に希望するものである。

台地上全域に古墳が点在する西都原は、古来、地域住民の信仰的な場とされてきた。そのことは文献上にも明らかで、国府時代の総社とも注目される三宅神社を中心に、現代に継承される古墳祭が、応永年間（１３９４～１４２８）には「山陵祭」としてすでに執行されている。

藩制時代もこの「山陵祭」は続けられているが、その祭場は三宅神社ではなく、巨大古墳の男狭穂塚前であった。

この祭事を意味するものに、西都原の呼称が「祭事原」「斉殿原」であったこと、この「さいでんばる」が「さいとのはる」となり、「さいとのはる」が現在の「西都原」と変化してきた。西都原の最も逆上る年代資料としては、男狭穂塚の参道に奉納された石灯に、文化１４年（１８１７）の金石文が残される。

２基の石灯に刻まれた文字は、「謹造樹萬基燈」「寺原・西都原若衆中」「文化十四丁丑稔小陽初旬日」と方形竿石の三方に記され、当時にはすでに西都原の文字が使用されていた事を示している。

古墳文化の栄えた西都原は、先史時代の遺跡も、発掘調査や開発もすすんでいない事から特別に取り上げるものもなく、風土記の丘の南端部に於ける前期縄文遺跡の確認や、東方の縄文晩期土器片散布、さらに寺原集落に接して発見された弥生時代住居跡等とわずかな数である。

大正時代、この地で古墳の発掘が実施されたことは画期的な大事業であり、西都原古墳群の学術性がより高く評価された事はいうまでもない。

そして同１３年には、史跡名勝天然記念物保存法による仮指定を受け、昭和９年５月に史跡指定を受ける。

時代もすすみ昭和２５年になると、それまで分割されていた保存法等が統括され、文化財保護法となった。この新法によって西都原古墳群は、昭和２７年３月特別史跡の指定を受けるに至った。

西都原古墳群については、以上の如く国によっての保護策も講じられたが、宮崎県としても昭和３３年９月には、県定公園に指定し同３６年４月には、県立公園として昇格

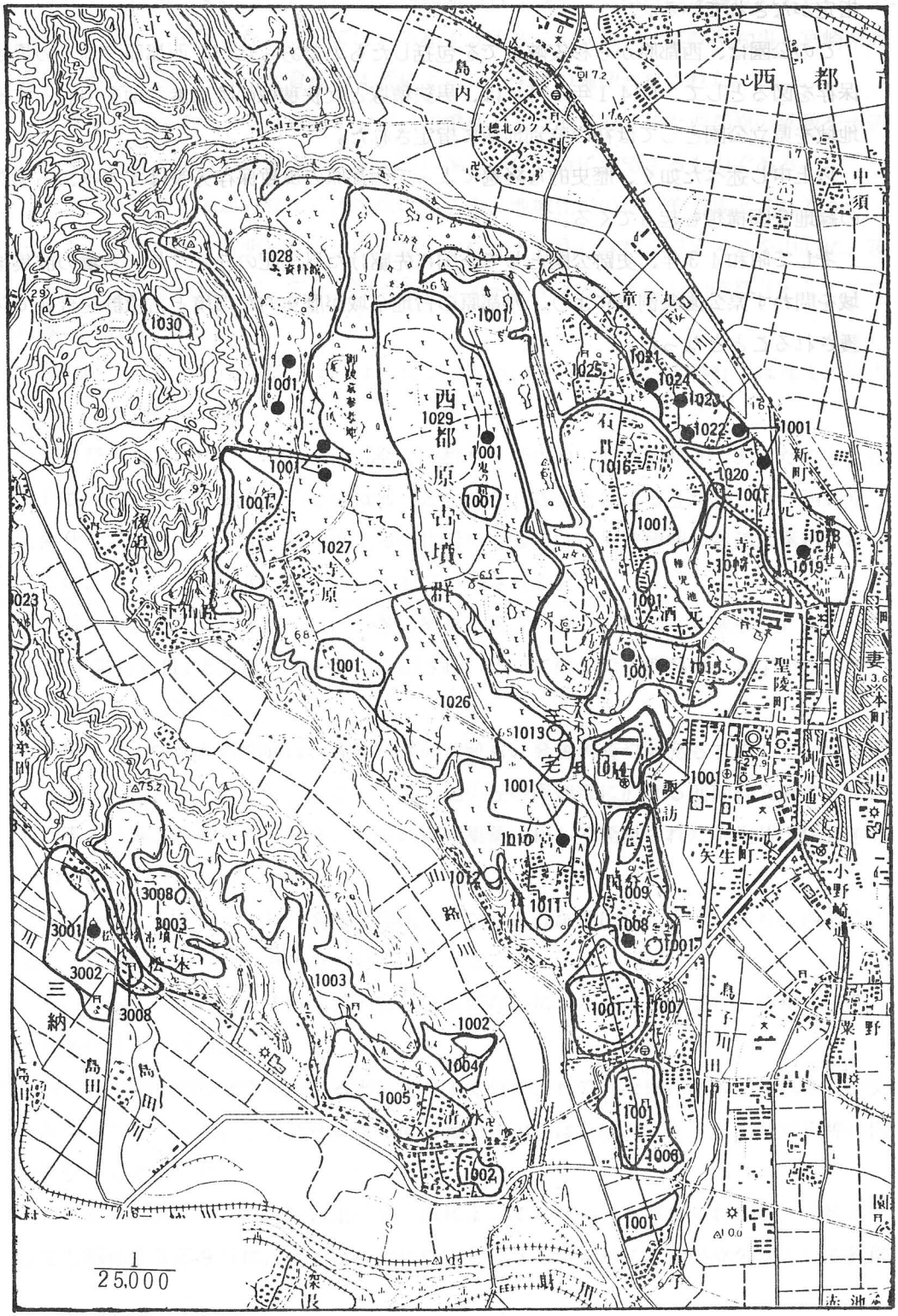
指定がなされている。

この公園は、西都原から杉安峡までを包括したものであったが、西都原台地上の風致保存を図るとして、同４１年１月には、男狭穂塚と女狭穂塚の陵墓参考地を中心とする地域を県立公園としては初の特別地域に指定された。

以上申し述べた如く、歴史的な経過によって西都原の風致保存方策はすすみ、古墳群の緑地公園構想も起ってくる。

そして昭和４３年、史跡公園として全国に先駆けた風土記の丘となり、古墳の群集地域を問わず県公園条例等により、西都原の台地全域が歴史的な環境と古墳群を合せて保護されることとなった。

第３図　周辺遺跡分布図



# 遺跡分布地名表

## 妻　地　区

| 遺跡番号 | 名　称 | 所　在　地 | 種　別 | 時　代 | 旧番号 | 文　献 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1001 | 西都原古墳群 | 大字三宅・妻・童子丸・右松 | 古　墳 | 古　墳 | 16-13 | 発掘調査報告書ほか西都市史等 | S.27.3.29. 国特別史跡指定 |

| 西都原古墳群明細 | 前方後円墳 | 円　墳 | 方　墳 | |
|---|---|---|---|---|
| 大字三宅字原口二 | 4基 | 52基 | | |
| 〃　笹貫畑 | | 4基 | | |
| 〃　酒元ノ上 | 4基 | 37基 | | |
| 〃　東立野 | 7基 | 40基 | | |
| 〃　西都原東 | | 53基 | | 1基滅失 |
| 〃　丸山 | | 3基 | 1基 | |
| 〃　寺原 | 3基 | 22基 | 1基 | 3基滅失 |
| 〃　原口 | 1基 | 7基 | | |
| 〃　須先 | | 1基 | | |
| 〃　国分 | 1基 | 2基 | | |
| 〃　尾筋東上 | 3基 | 2基 | | |
| 〃　尾筋西上 | 1基 | 6基 | | |
| 〃　尾筋東下 | 1 | 2基 | | |
| 〃　尾筋西下 | | 3基 | | |
| 〃　竹之脇 | 1基 | | | |
| 〃　鳥子長田 | | 3基 | | |
| 〃　堂ヶ島 | | 11基 | | |
| 〃　寺崎 | | 2基 | | |
| 〃　馬場崎 | | 1基 | | |
| 〃　上ノ宮西 | | 1基 | | |
| 〃　寺原脇 | | 1基 | | |
| 大字妻字妻園 | | 1基 | | |
| 大字童子丸新立 | 1基 | 10基 | | |
| 〃　権現原 | | 2基 | | |
| 大字右松字刎田 | | 1基 | | |
| 〃　寺馬場 | | 1基 | | |
| 〃　鷺田 | 1基 | 11基 | | |

| 遺跡番号 | 名称 | 所在地 | 種別 | 時代 | 旧番号 | 文献 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1002 | 清水西原古墳群 | 大字清水・三宅 | 古墳 | 古墳 | 16-30<br>16-31<br>16-32 | 日向地誌 | S.9.417. 県指定史跡 |
| | 清水西原古墳群所在地明細<br>大字清水字松崎　前方後円墳　2基<br>〃　寺山　円墳　4基　1基滅失<br>大字三宅字西原　円墳　19基　1基滅失 | | | | | | |
| 1003 | 上ノ原遺跡 | 大字清水字上ノ原<br>寺山 | 散布地 | 古墳～平安 | | | |
| 1004 | 寺山遺跡 | 大字清水字寺山 | 散布地 | 古墳 | | | |
| 1005 | 清水遺跡 | 大字清水字大蘭・松崎<br>慶久原 | 散布地 | 弥生～古墳 | | | |
| 1006 | 下尾筋遺跡 | 大字三宅字尾筋東下<br>尾筋西下 | 散布地 | 弥生～平安 | 16-28 | 日向国史 | |
| 1007 | 上尾筋遺跡 | 大字三宅字尾筋東上<br>尾筋西上 | 散布地 | 弥生～平安 | 16-28 | 日向国史 | |
| 1008 | 日向国分寺跡 | 大字三宅字国分 | 寺跡 | 奈良～江戸 | 16-33 | 日向地誌・発掘調査報告書ほか | |
| 1009 | 国分遺跡 | 大字三宅字国分<br>大字右松字鷲田 | 散布地 | 縄文～江戸 | | | |
| 1010 | 上宮遺跡 | 大字三宅字上ノ宮東<br>上ノ宮西 | 散布地 | 弥生～平安 | | | 丹裳小野伝承地を含む遺跡 |
| 1011 | 上宮古墳 | 大字三宅字上ノ宮西 | 円墳 | 古墳 | | | 2基(1基は½滅失) |
| 1012 | 上宮城跡 | 大字三宅字上ノ宮西 | 城跡 | 中世 | | | |
| 1013 | 三宅城跡 | 大字三宅字原口 | 城跡 | 室町～安土桃山 | | 日向記・日向地誌 | |
| 1014 | 諏訪遺跡 | 大字三宅字毘沙門<br>大字右松字鷲田 | 散布地 | 縄文～古墳 | | | |
| 1015 | 酒元遺跡 | 大字三宅字須先・笹貫畑<br>山王前畑 | 散布地 | 弥生～江戸 | 16-29 | | |
| 1016 | 堂ヶ島遺跡 | 大字三宅笹貫畑・石貫畑<br>大字妻字妻園 | 散布地 | 弥生～平安 | | | |
| 1017 | 寺崎遺跡 | 大字三宅字寺崎<br>大字右松字刎田<br>大字妻字上妻 | 集落跡 | 弥生～江戸 | 16-26 | | 旧番号は坂元遺跡 |
| 1018 | 上妻遺跡 | 大字右松字刎田<br>大字妻字上妻 | 散布地 | 縄文～江戸 | | | |
| 1019 | 経塚 | 大字妻字上妻 | 経塚 | 平安 | 16-27 | | 都万神社境内 |
| 1020 | 法元遺跡 | 大字三宅字馬場崎<br>大字右松字刎田<br>大字妻字壱丁畑 | 散布地 | 弥生～江戸 | | | |
| 1021 | 童子丸遺跡 | 大字童子丸字横ノ内・上園<br>寺ノ馬場 | 散布地 | 縄文～江戸 | | 日向国史 | |
| 1022 | 上園古墳1号 | 大字童子丸字上園 | 円墳 | 古墳 | | | |
| 1023 | 上園古墳2号 | 大字童子丸字上園 | 円墳 | 古墳 | | | |
| 1024 | 上園古墳3号 | 大字童子丸字上園 | 円墳 | 古墳 | | | |
| 1025 | 石貫遺跡 | 大字三宅字石貫平ノ下 | 散布地 | 縄文～江戸 | 16-25 | 佐土原藩史稿 | 伝承遺跡の保存地域 |
| 1026 | 原口遺跡 | 大字三宅字原口二ノ西<br>原口・原口二 | 散布地 | 弥生～平安 | | 日向国史 | |
| 1027 | 寺原遺跡 | 大字三宅字寺原・寺原脇 | 集落跡 | 弥生～平安 | 16-24 | 日向国史 | |

| 遺跡番号 | 名称 | 所在地 | 種別 | 時代 | 旧番号 | 文献 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1028 | 丸山遺跡 | 大字三宅字丸山・西都原東西都原西 | 散布地 | 弥生～平安 | | 日向国史 | |
| 1029 | 西都原遺跡 | 大字三宅字東立野・酒元ノ上原口二 | 散布地 | 縄文～古墳 | | 西都市史 | |
| 1030 | 伝・山路城跡 | 大字三宅字上田津ヶ丸 | 城跡 | 中世 | | 日向地史 | |
| 1031 | 四日市遺跡 | 大字岡富字四日市 | 散布地 | 奈良～平安 | | | |
| 1032 | 有峯城跡 | 大字岡富字有峯 | 城跡 | 室町～ | | 日向地史 | |
| 1033 | 祇園原遺跡 | 大字右松字祇園ノ上 | 散布地 | 縄文～古墳 | 16-34 | 西都市史・日向国史佐土原藩史稿 | 旧番号は大口川遺跡 |
| 1034 | 新田原古墳群 | 大字右松字祇園ノ上 | 古墳 | 古墳 | 16-31 | 県史跡調査報告(4) | |

## 3. 発掘調査の概要

本調査の対象となった土木工事は、農業の近代化施設を導入し農家所得の向上を図るため、一ツ瀬川の水を西都原に送る送水管埋設工事であり、台地上の幹線総延長1,600メートル、支線に1号、2号、3号の3支線がある。

調査地の設定は、支線の3線とも傾斜地であること、掘削面が狭小ということから工事中の立合いとし、幹線は幅1メートル、深さ約1.5メートルの掘削であり、全地の調査を必要とした。

しかし幹線内に、目通り径30㎝前後の杉が間隔も置かず防風林として植樹された個所があり、この地は調査も不可能な樹根による攪乱も受けているとして除外し、調査地の総延長を約1,236メートルと設定した。

調査は、西都原台地の北東端に位置する古墳群中第3古墳群の北辺に接した工事工区の12工区から着手し、順次13工区・14工区と工事の進行に関連して行ったが、地形等の都合上、13工区の調査をA・B・C、14工区の調査地をA・Bに区分した。

また送水管の埋設工事は、主として道路敷地に施行される事から、調査作業の困難を予想し、最初に砂利層の道路面及び舗装面を重機によって掘削し、その後に第Ⅲ層（赤ホヤ）まで掘り下げて遺構等の検出を行った。

第Ⅲ層での調査が終了した後、5～6メートル間隔に長さ2メートルのトレンチを入れて、第Ⅵ層まで掘り下げ、遺構・遺物の有無を確認し、埋蔵が確認された地域は全面を掘り下げて調査をすすめた。

12工区調査地は、穂北平野から西都原に上る旧道で、台地に達した地点から調査地とし、中央部に向って約43ｍ進み、曲折して北上する総延長125ｍの平担地である。

出土した遺構は、方形状土坑2基、円形状土坑2基、溝状遺構1基、柱穴1個であり、遺物は、第Ⅵ層上の全面に径5～20㎝程の焼石が散乱し、この焼石に混じって多くの縄文土器片等が出土した。

13工区A調査地は、12工区が北辺で西に向って曲折した地点に始まり、延長310ｍの農道で、西辺を市道西都原線までとした。

出土遺構は、方形状土坑1基、円形状土坑1基、溝状遺構1基、柱穴28個が検出され、遺物については、12工区につづき120ｍの位置まで第Ⅵ層上に焼石が散布し、前項同様縄文土器片が混じって出土した。

焼石が消滅した地点以西では、36ｍ離れた位置に約2ｍ程の区域で焼石が検出した

だけ、以後は全調査地から焼石は検出されていない。

１３工区Ｂ調査地は、同一工区であるが市道西都原線によってＡ区と区分し、市道に沿って南下する４３ｍの調査地であり、以南は、前述の如く杉が植樹され調査は不可能であった。

この場所は、栗が植栽され過去に於ける整地も実施済地であって、第Ⅲ層は滅失し第Ⅵ層まで人力で掘り下げ遺構等の検出作業を行った。

出土遺構は、溝状遺構２基であり、遺物は遺構に伴った遺物と想定しがたい縄文土器片がわずかに出土しているだけである。

１３工区Ｃ調査地は、Ｂ調査地と同様市道に沿って西側を南下し、約１００ｍの間を置いた延長１１９ｍの調査地である。

現状は畑作地であるが、過去にゆるやかな東向きの傾斜地を削平し、略平担の畑地に改良、さらに調査対象個所は、防風林の杉が植樹された時期もある等、かなりの攪乱を受けていた。

調査は、人力によって第Ⅲ層まで掘り下げ、遺構・遺物の検出を行ったが、横断する溝状遺構１基を検出しただけ、遺物は出土していない。

土層も、第Ⅲ層の滅失個所が多く攪乱層も多かった。以下トレンチを入れて第Ⅵ層まで掘り下げ、遺構等の所在確認を行ったが、検出するには至らず調査を終わる。

１４工区Ａ調査地は、西都原台地の中央に位置する宮内庁所管の陵墓参考地北辺を東西に横断する市道上であって、総延長６３９ｍの内東方２７５ｍをＡ調査地として、西方３６４ｍと区分し調査を実施した。

調査地は、さらに東部・中部・西部とに区分すると、東部は１３工区Ｃ調査地につづく地形で西端は下り坂、中部は、北方が一段と高くなった地域から南方に下る谷間状の地形であり、西部は上り坂となった変化する地形である。

東部の北辺は、近世に寺院が建ち集落の２～３戸が存在したとする地域であって、これらと関係する遺構の出土も考慮していたが、遺物の出土もなく、わずか柱穴３個が検出されただけである。

中部は前述の如く谷間状の地形で、溝状遺構３基が検出されたが、遺物は出土していない。西部も地形上からか、遺構の検出はなく土器片３点が出土しただけである。

総合的に本調査地は、舗装道路であることから重機によって表土を削除する。東部は表土の直下に第Ⅲ層が所在し、中部は盛土された地形が多く、西部も第Ⅲ層は浅く、地形的に滅失した個所が多かった。

調査は、第Ⅲ層によって遺跡の所在を確認し、第Ⅵ層迄はトレンチを入れたが、第Ⅲ層滅失部が多く、大半を第Ⅵ層まで掘り下げて調査をすすめた。

１４工区Ｂ調査地は、調査地の最終区で前項Ａ調査地につづく市道上の調査地である。この調査地の地形は、北辺が高く南辺の低い急傾斜地で、西辺最終地約６０ｍ程がゆるやかな傾斜地となっている。

この地形上に、市道が横断し送水管埋設工事が施行されるが、大半地に遺構・遺物の検出はなく、西辺附近に方形状土坑１基・溝状遺構１基の所在が確認された。

出土遺物は、溝状遺構上に寛永通宝の古銭が１個、少し間隔を置いた地点に土器片２点が出土しているだけであった。

以上が発掘調査の概要であるが、検出した遺構は、横幅約１ｍの帯状調査地であった事から、古墳の周溝・住居跡の一隅等と想定される遺構も検出されたが、遺構名を詳らかとするに難が多く、方形状・円形状・溝状等とした。

出土した遺構は、方形状土坑４基、円形状土坑３基・溝状遺構９基・柱穴32個である。

出土遺物は、縄文土器・土師器・須恵器・石鏃・石斧・石錘・敲石・剥片・フレイク・陶磁器・古銭と総計１６９点が出土している。

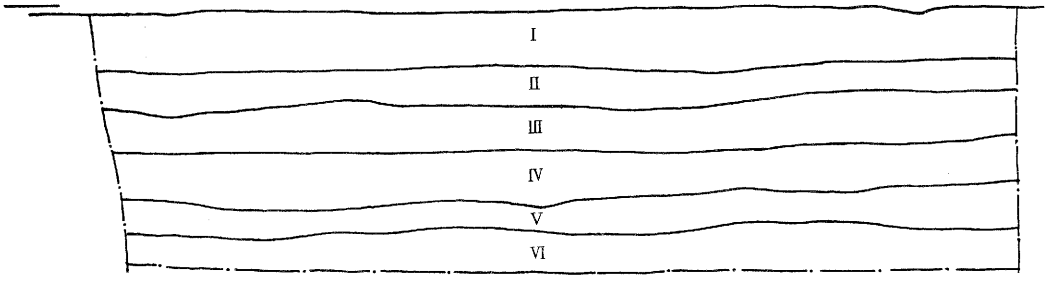
これらの遺物は、主流となるのが第１表のとおり縄文土器１２６点であり、主に東辺調査地から出土しているが、石器と古銭を除き完形もしくは完形に近い遺物はなく、すべてが小片の遺物として出土している。

土層については、層位の基本を包含層の確認できる位置とし、全調査地の平均的な13工区Ａ調査地の中央部に置き、第Ⅵ層まで掘り下げて確認した。層位は次のとおりである。

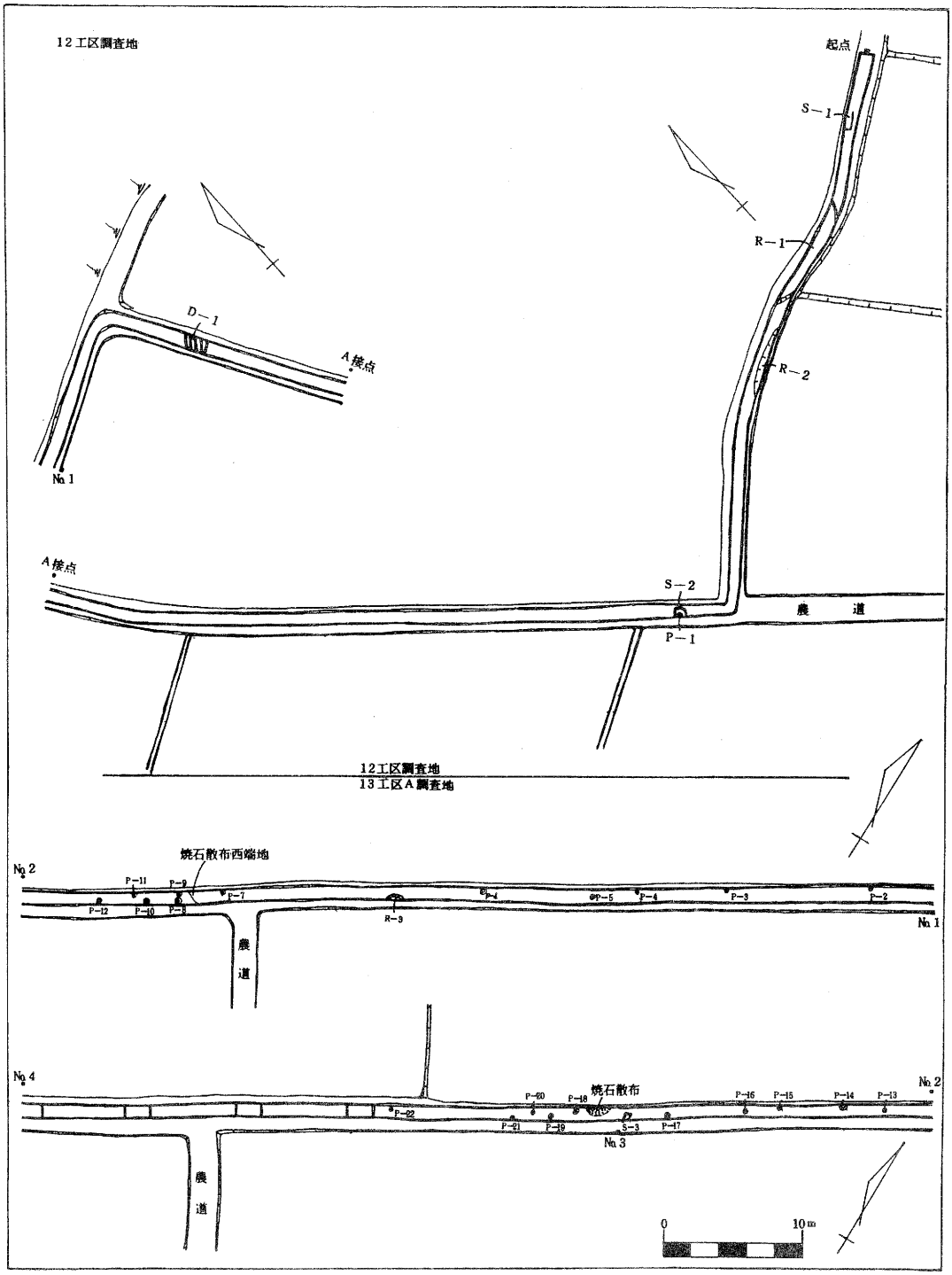
| | | | |
|---|---|---|---|
| 第Ⅰ層 | 表　土 | 第Ⅳ層 | 黒褐色土 |
| 第Ⅱ層 | 黒色土（第Ⅰ層と同） | 第Ⅴ層 | 暗褐色土 |
| 第Ⅲ層 | 明黄褐色土（赤ホヤ層） | 第Ⅵ層 | 褐色土 |

遺物は、第Ⅵ層の上部より出土しているが、それ以下の層位からは検出されていない。

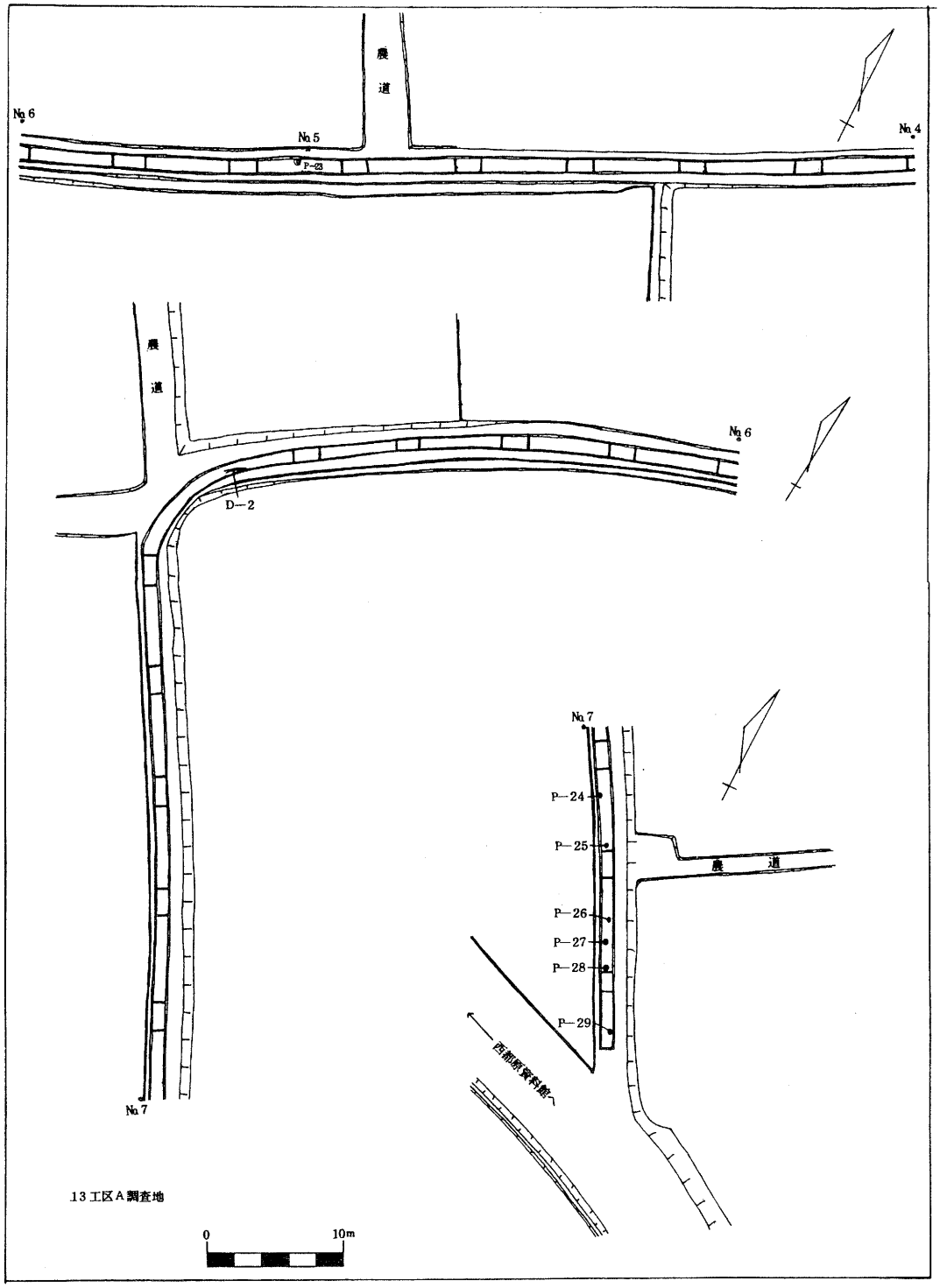
**第４図　土層断面図**　　13工区Ａ調査地中央部



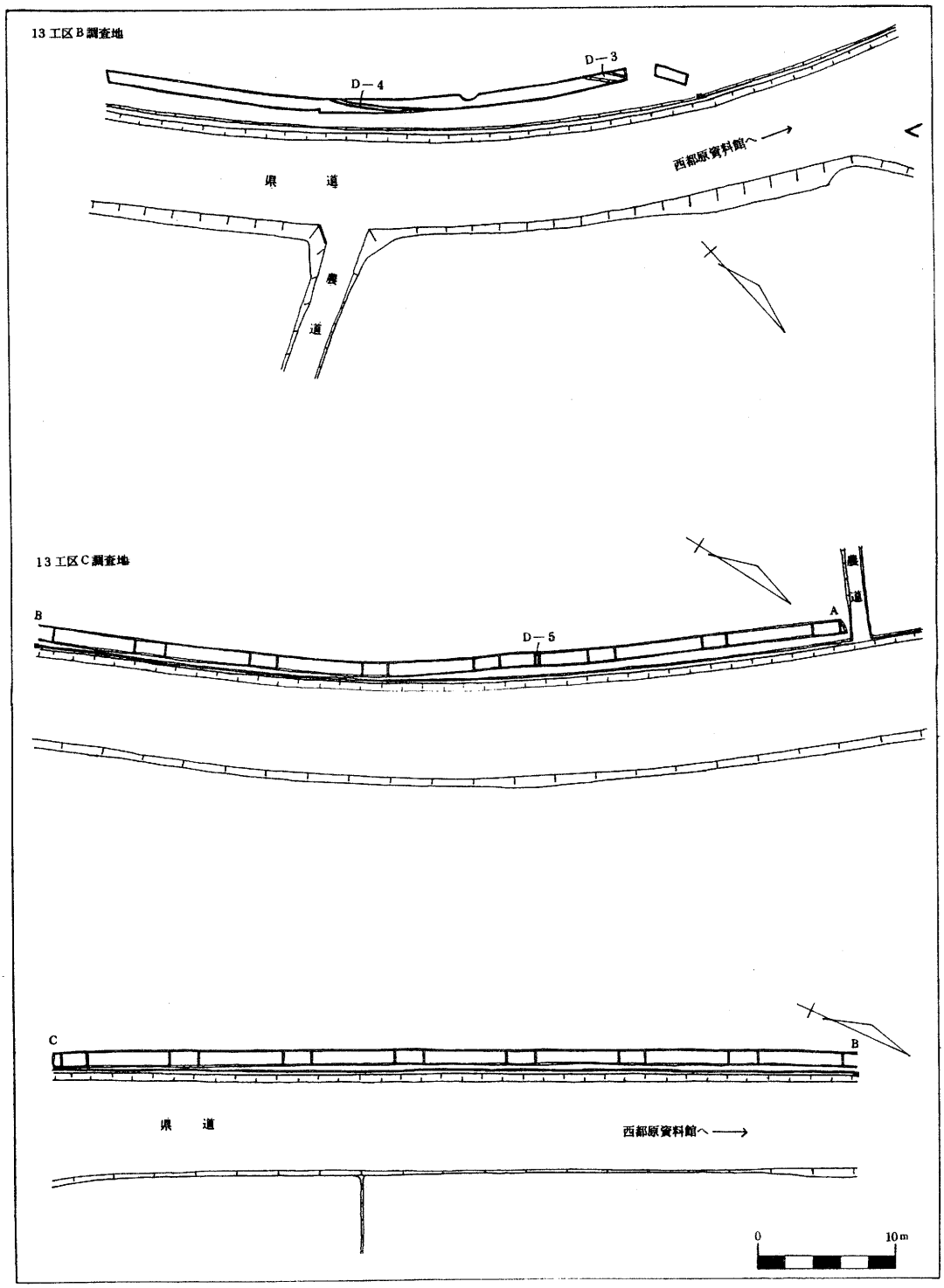
第５図　調査地平面図．遺構位置図(1)



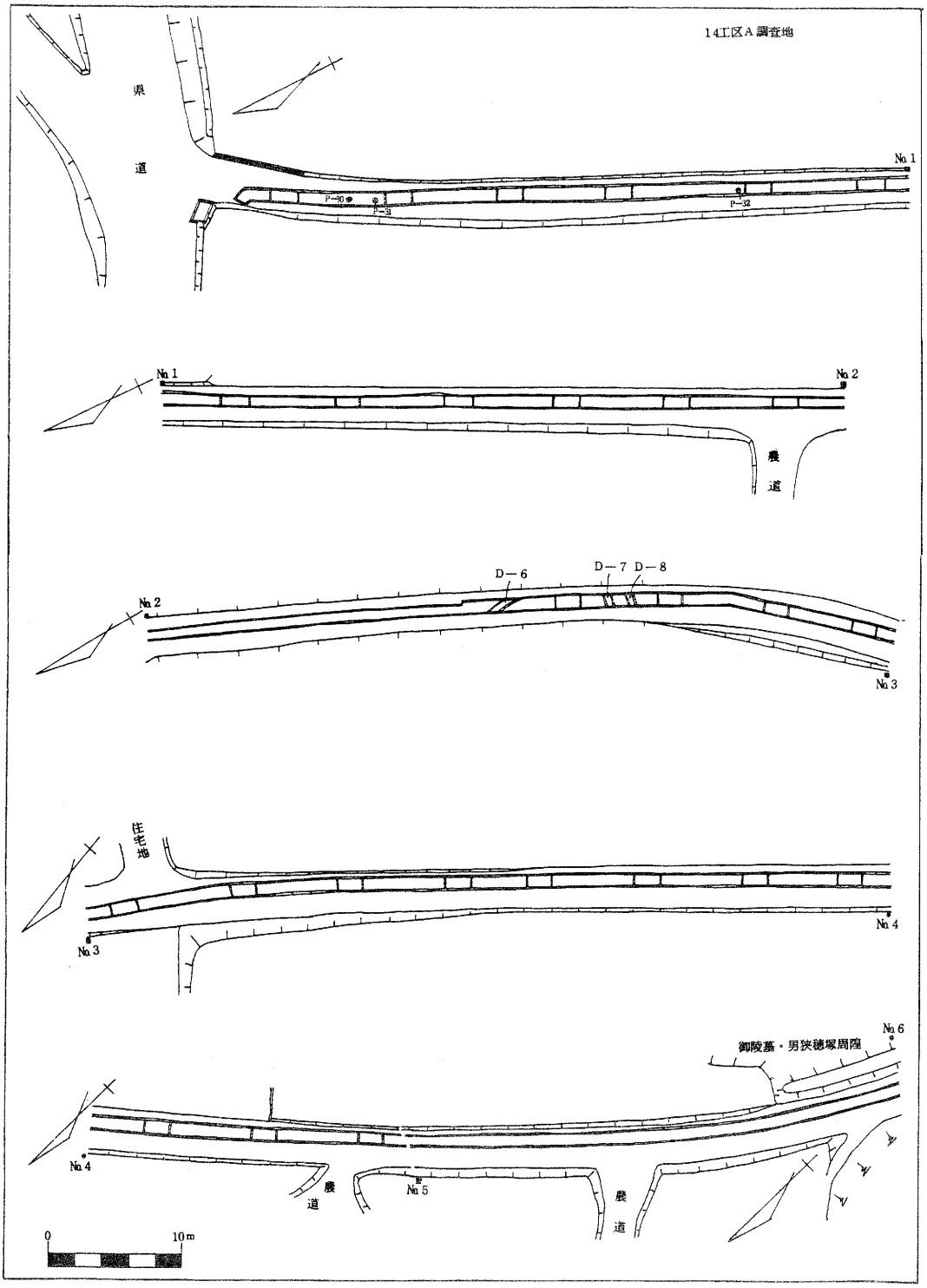
第５図(2)


農道
No.6
No.5
P-23
No.4
農道
No.6
D—2
No.7
No.7
P—24
P—25
P—26
P—27
P—28
P—29
農道
西都病資料館
13工区A調査地
0
10m

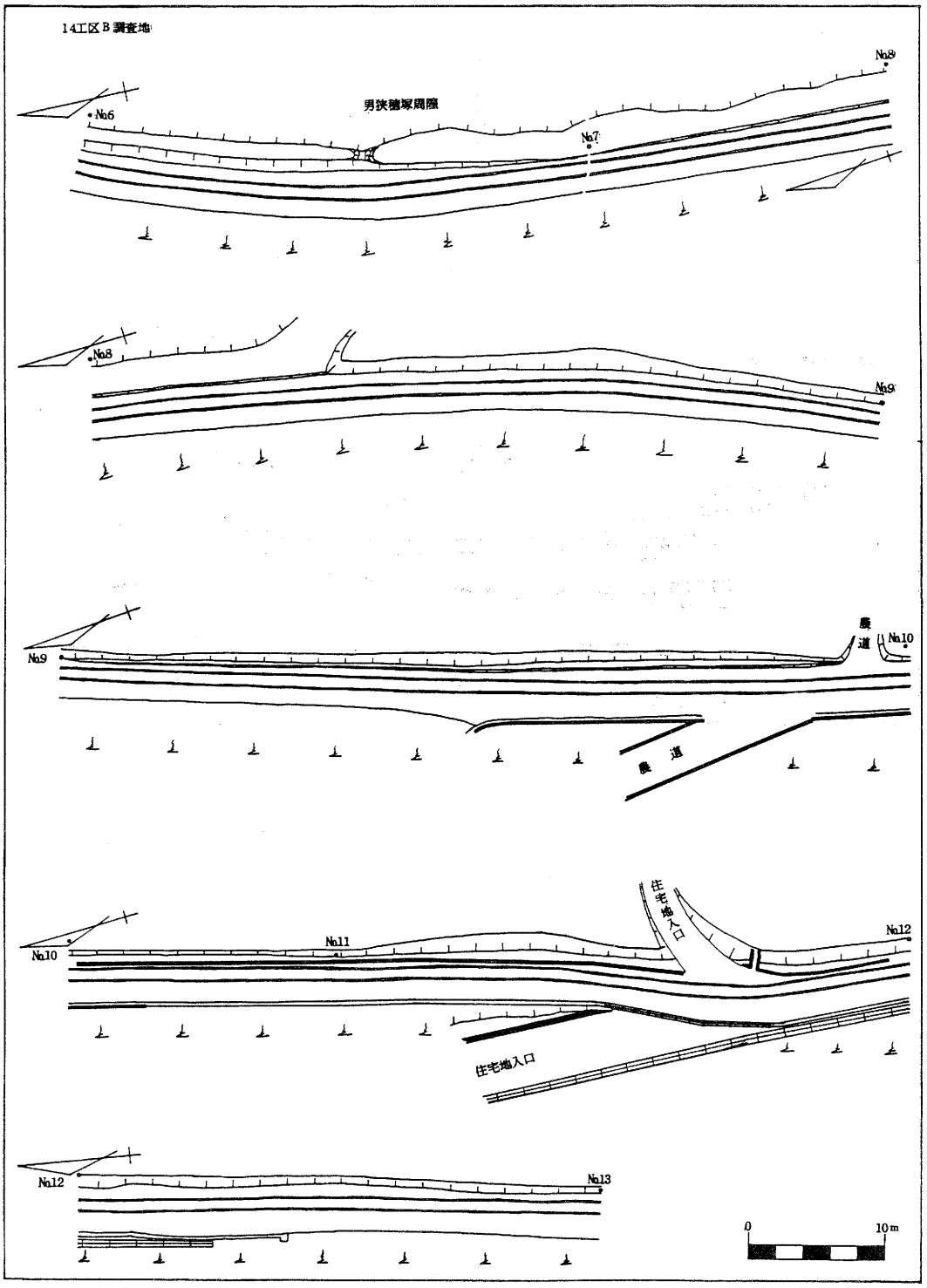
第５図(3)


13 工区 B 調査地
D－3
D－4
西都原資料館へ
県　道
農
道
13 工区 C 調査地
B
A
D－5
農
道
C
B
県　道
西都原資料館へ
0
10m

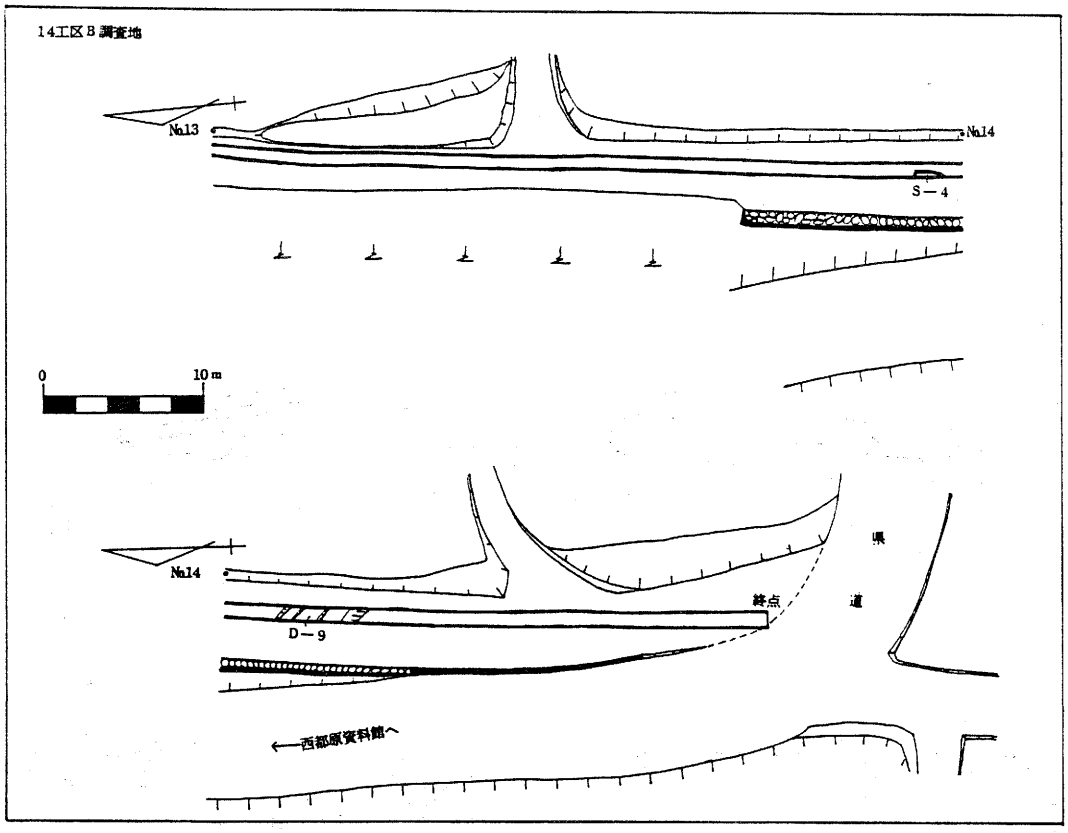
第５図(4)


14工区A調査地
県
道
No.1
P−30
P−31
P−32
No.1
No.2
農
道
No.2
D−6
D−7
D−8
No.3
住宅地
No.3
No.4
No.6
御陵墓・男狭穂塚周隍
No.4
農
道
No.5
農
道
0
10m

第５図(5)


14工区B調査地
男狭穂塚周隍
No.6
No.7
No.8
No.9
No.10
No.11
No.12
No.13
廃道
住宅地入口
0
10m

第５図(6)



# Ⅱ. 遺構と遺物

## 1. 遺　　構

### 方形状土坑１号（第６図）

この遺構は、１２工区調査地の東端起点から、約５ｍの位置に検出された。地形は、西方が高いゆるやかな傾斜地で、調査地に平行し方形状土坑の一角が出土、東辺は傾斜地のため滅失している。

地層第Ⅲ層に確認された遺構は、南西隅だけが遺存し、南東隅は消滅他隅は調査地外のため確認されていない。

検出遺構の壁長は、南壁が略東西に1.９５ｍ、西壁長４５㎝迄で終り、検出床からの遺存壁高は１９㎝である。

遺構の南西隅は方角隅で、壁面の立上り等から古代住居跡とも想定されるが、一部の検出であり、北辺が調査地外のため遺構の全容を確認するには至らなかった。なお埋土は黒色土であり、遺物は伴っていなかった。

### 方形状土坑２号（第６図）

この遺構は、調査地起点から西に４２ｍ進み、さらに曲折して北方へ約３ｍの地点に、柱穴１号を伴って検出された。地形は平担地。

遺構は長方形の規模を有し、中心長軸は８３㎝、横幅７０㎝の小土坑で、南および北隅は方角隅、東および西隅は円曲線を描く変形プランを呈する。

第Ⅲ層による遺存壁高は約１０㎝、遺構の種別は詳らかでなく、遺物も伴っていない。

なお、同遺構の西隅に径３８㎝、深さ４３㎝の柱穴（１号）が堀り込まれているが、遺構に関係するかは断定できない。柱穴内からも遺物は出土していない。

### 方形状土坑３号（第６図）

この土坑は、１３工区Ａ調査地の中央附近に検出した遺構で、調査地の南側壁下から突出し、その部分が方形であることから方形状土坑とした。

検出部の規模は、横幅５３㎝、長軸は約６０㎝、延長は調査地外のため計測不可能で、遺構の全容を確認するに至らなかった。

第Ⅲ層による遺存壁高は３５㎝を計測し、検出した２隅は方角隅である。床は平面で

隅は角張って立上る壁面であった。

### 方形状土坑４号（第６図(2)）

この遺構は、１４工区Ｂ調査地の調査終点から、東へ約３７ｍ進んだ位置に、西側壁と平行して検出された方形状の一辺のみの遺構である。

地形は、ゆるやかな傾斜地であって、第Ⅲ層による規模は、長軸約２ｍ、他方は調査地外のため不明確である。北壁の検出長は約４０㎝、南壁は方形状の隅位置で検出されず、遺存壁高は約２２㎝である。

長方形か方形プランかも詳らかでなく、小規模の住居跡とも想定されるが、全容も確認するに至らなかったことから、遺構を方形状としたものであり、遺物は伴っていなかった。

### 円形状土坑１号（第６図(2)）

この遺構は、１２工区調査地起点から西に約１１ｍ進んだ位置に、主体部を北辺調査地外に置き、円形状の南端部が検出されたものである。

検出部の略東西長は約8.6ｍ、南北中心部の南端はわずかしか検出されていない。第Ⅲ層による遺存壁高は、東端で約１５㎝、西端で２６㎝、検出床面の東西高低差は東方が低く約２４㎝である。

この遺構の南約２０ｍには、西都原古墳が点在し、地形的に古墳の周溝とも想定されるが、遺物は伴わず一部遺構の検出であって、遺構名を確定するに至らなかった。

### 円形状土坑２号（第６図(2)）

この遺構は、円形状土坑１号の西に約１ｍの間を置いて検出された。前項遺構同様古墳周溝とも想定されるが、円形状の北端部が検出しただけで、遺構名を決するには至らなかった。

第Ⅲ層に掘り込まれた遺構は、ゆるやかな円曲線を描き、東西に5.7ｍ延びている。南北の検出は４０㎝、深さは２６㎝で床面に達している。遺物は伴っていなかった。

### 円形状土坑３号（第６図(2)）

この遺構は、１３工区Ａ調査地の起点・東端から西に約３９ｍ進んだ南壁面寄りの小規模遺構として検出された。

第Ⅲ層による検出規模は、東西1.０８ｍ、南北２７㎝の検出で、半月状を呈し遺物は伴っていなかった。

南面が調査地外のため、円形か楕円形か等も不明確であり、遺構名を決するには至らなかった。検出遺構の深さは約１０㎝である。

**溝状遺構１号（第７図）**

溝状遺構１号は、１２工区調査地の北辺部に検出された遺構である。南北に延びた調査溝を東西に横断し、北端に１条が独立溝として第Ⅲ層に掘り込まれ、さらに南へ約40㎝隔れ２条の溝が切合して検出された。

北辺の独立溝は、中心幅８２㎝、深さ３５㎝である。他２条溝の内北溝は、横幅の計測ができないが、深さは３５㎝、床面は南に２６㎝延びて南辺溝と切合する。

南辺溝は、中央溝との切合部から、横幅は約１ｍ、深さは切合部から約１２㎝下って第Ｖ層に達し、南壁高も中央溝との切合部と同高位で、その上層位は攪乱を受けている。遺物は伴っていない。

**溝状遺構２号（第７図）**

溝状遺構２号は、１３工区Ａ調査地が東から西に延び、西辺で急曲して南に向う地域に検出された。

調査溝に略並行し、第Ⅲ層に掘り込まれた検出長径は約2.５ｍ、遺存壁高約２０㎝、東端は調査地外へ入り込み、西端は攪乱層となって滅失する。

円形状に延びる遺構は、円墳周溝等とも想定されるが、附近に古墳も所在しないし、一部検出という事から遺構名を決するに至らなかった。遺物も伴っていなかった。

**溝状遺構３号（第７図）**

溝状遺構３号は、１３工区Ｂ調査地の北辺に検出された遺構である。本調査地は１３工区の西端が市道西都原線によって分断され、ここより市道に沿って南下する調査地である。

遺構は調査溝を横断して検出され、やゝ半月状の床面となった溝である。第Ⅲ層に掘り込まれ、遺存溝の横幅は８４㎝、深さは２３㎝を計測する。遺物は伴っていない。

### 溝状遺構４号（第７図）

溝状遺構４号は、前項遺構の南約１２ｍの位置に、細長い溝状で検出された遺構である。

周辺には、縄文土器片数点が散布しているが、遺構に伴った遺物かは詳らかでない。

検出遺構の規模は、長さ約7.０ｍ、中心横幅３１㎝、深さ７㎝、床の形状は略平面で西端は角度を有して壁面が斜上する。

調査溝の東壁内から、西壁内へ斜に延びる帯状の小溝である。

### 溝状遺構 ５号（第７図）

溝状遺構５号は、１３工区の最終地近く・同Ｃ調査地の北辺に、調査溝を東西に横断して検出された。

第Ⅲ層に検出された遺構の規模は、横幅４７㎝、深さ９㎝、床は平面で両端は角度を有して斜上する。遺物は伴っていない。

### 溝状遺構 ６号（第７図）

溝状遺構６号は、１４工区Ａ調査地の中央部谷間状地形地に検出された。

第Ⅲ層に掘り込まれており、形状は調査溝を斜線に横断し、床の南端は東辺が中央に少し寄って略円形状となっている。

規模は、中心横幅６４㎝、深さ３１㎝、延長は、両端が壁面下に延びて確認されない。遺物は伴っていなかった。

### 溝状遺構 ７号・８号（第７図）

この２条の遺構は、前項６号の西方約６ｍと近接して検出された。共に第Ⅲ層に掘り込まれ、調査溝を直に横断する。

７号と８号の間は８５㎝、規模は、７号が中心幅６０㎝、深さ７㎝、８号は幅５６㎝、深さ１０㎝が遺存する。

床の形状は、７号が略平面状の床で、両端はやゝ丸味をおびて斜に立ち上る。８号は、半月状の床面を呈するも、北辺はやゝひずみがあり、床面と壁面は区分されない。７号・８号とも遺物は伴っていない。

### 溝状遺構９号（第７図(2)）

溝状遺構９号は、１４工区Ｂ調査地・本調査対象地の最終点から、略東方へ約２６ｍ進んだ位置に３条の横断する溝として検出された。

調査地内約３ｍに亘って横断する本遺構は、中央部分が相当の攪乱を受け、第Ⅲ層は西端部を残し滅失している。

この３条の遺構を、略西方からＡ・Ｂ・Ｃと略号を付し、Ａ遺構は独立して第Ⅲ層に検出された。横幅は約７５㎝、深さ３５㎝である。

床面の検出部は、北端が幅４５㎝、南端は約２０㎝と湾曲して狭くなっている。

Ｂ遺構は、Ａ遺構の東へ約４０㎝隔れて検出された。西壁は第Ⅲ層から掘り込まれているが、東壁はＣ遺構の構築によって削平されたと想定され、北辺にわずかな痕跡を残すのみである。

規模は、横幅の計測はできないが、床面の幅は約３０㎝、西壁の遺存高は３５㎝、直の横断ではなく、ゆるやかな円曲線を描いている。

Ｃ遺構は、第Ⅳ層Ⅴ層に検出され、調査溝を少し斜に横断する。遺構の西辺はＢ遺構の床と切合し、床は丸味をおびた溝状である。

遺存層による検出規模は、幅３４㎝、深さは１２㎝と浅いが、Ａ・Ｂ遺構の検出第Ⅲ層から想定すると４７㎝程となる。

３条の本遺構は、ともに土器類等の遺物は伴っていないが、Ａ遺構の西端上に流入遺物と思われる古銭（寛永通宝）１個が出土している。

### 柱穴１号～３２号（第８図）

柱穴（ピット）は、１２工区調査地に１個、１３工区Ａ調査地に２８個、１４工区Ａ調査地に３個、計３２個が検出された。埋土はすべて黒色土であった。建物跡としての確認はできなかった。

柱穴１号は、方形状土坑２号の項で記録したとおり、同遺構内に検出された柱穴（ピット）である。

２号～２２号の２１個は、１３工区の起点から西へ約１００ｍの間の調査地から、間隔も不均等に検出された。

第Ⅲ層に確認された同柱穴は、大半が径３０～４０㎝、深さ１５～４５㎝であり、19号の方形を除き円形もしくは楕円形である。

２３号は、２２号の西方約７３ｍの位置に１個だけ検出し、円形幅（径）は３０㎝、

深さ２２㎝、低部はやゝ乱れが感じられる。

２４号～２９号は、１３工区Ａ調査地の西端から、約２０ｍの間に不均等に検出された。この６個の内２６号・２７号・２８号は、間隔も２ｍ前後と列をなしているが、住居跡等と関連するかは確認されていない。

規模及び形状については、２６号と２９号が楕円形、他は円形状で径は２２～２３㎝深さは２４号が１８㎝、他は３５㎝前後であった。２４号を除く他はしっかりした遺構である。

３０号・３１号・３２号は、１４工区の起点近くに検出しているが、３０号・３１号間は約２ｍ、３２号は３１号の西約２７ｍと少し隔れた位置にある。

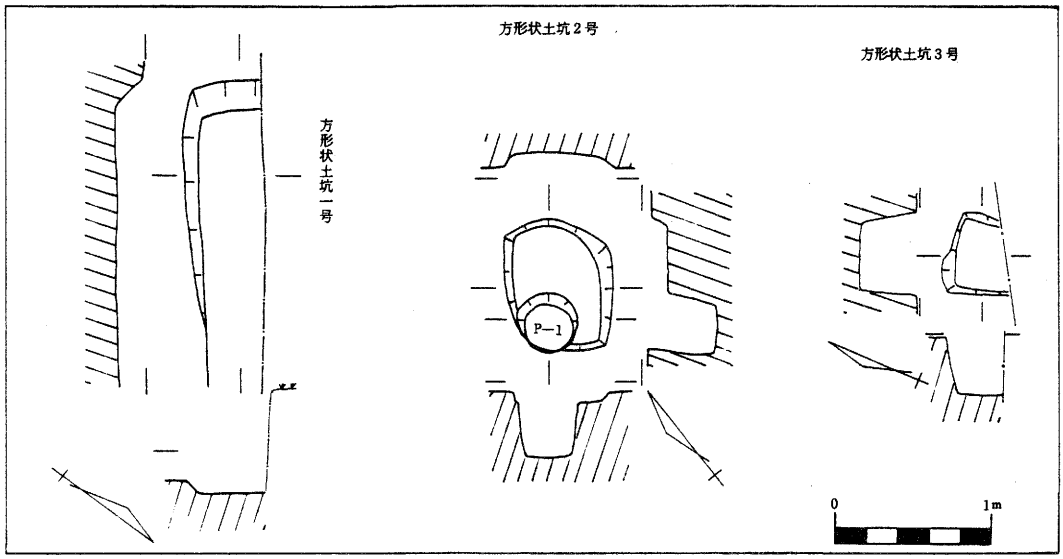
規模は、３０号の径３５㎝、深さ３４㎝、３１号は径３３㎝、深さ３２㎝、３２号は径２９㎝、深さ３２㎝、３個ともしっかりした円形の柱穴である。

検出した３２個の柱穴は、すべての埋土が黒色土であり、遺物は伴っていなかった。また柱穴間の間隔も不均等であり、古代住居跡・中近世建物の柱穴と断定することはできなかった。

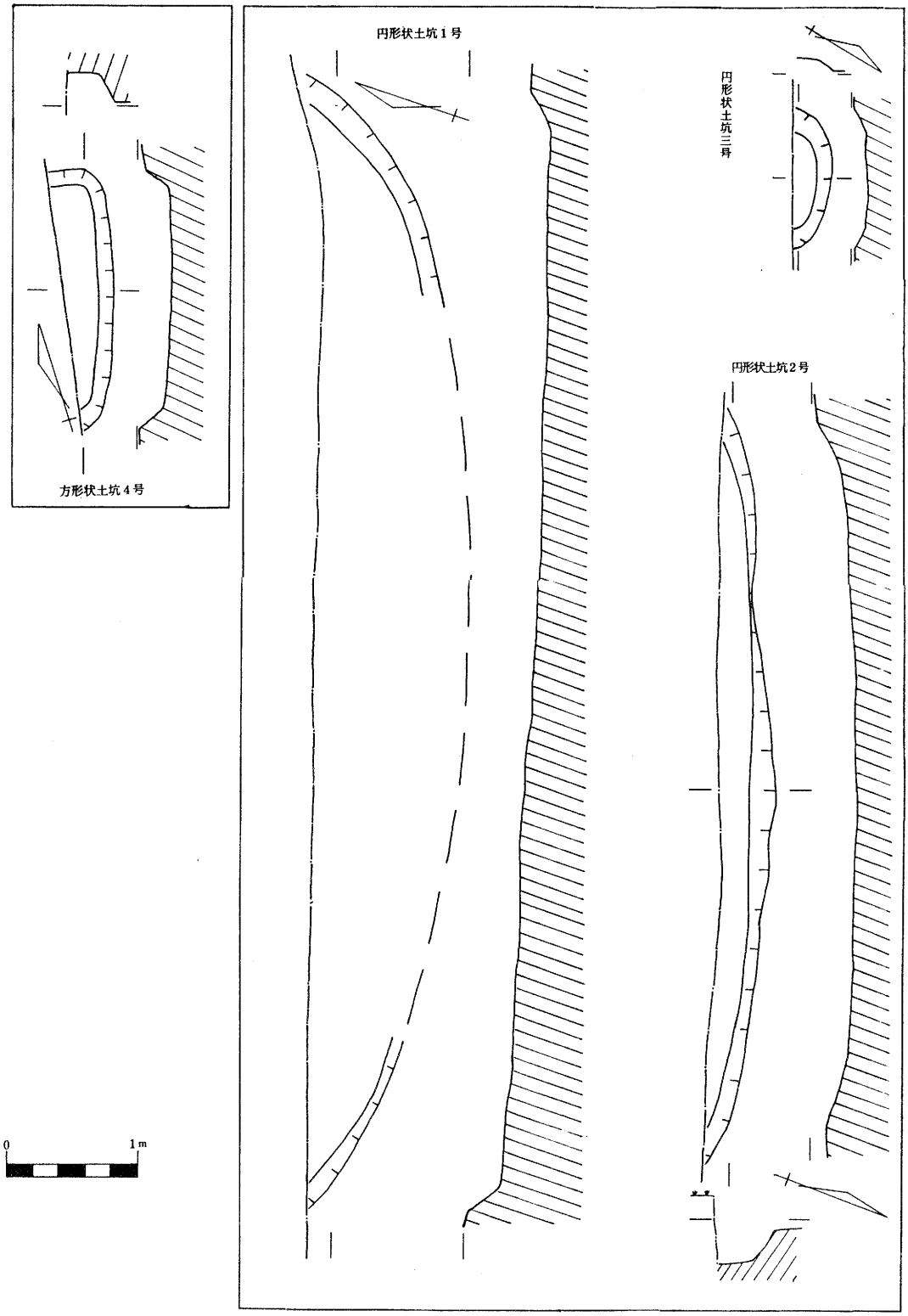
以上のとおり、検出された遺構について述べたが、調査地が横幅約１ｍと狭いこともあり、さらに遺構の大半が調査地外のため、全容を知る事も不可能であった。

これらの全遺構はまた、第Ⅲ層に検出された遺構で、埋土はすべて黒色土であったが、遺物が伴わず、諸事条件により遺構名の断定、時代判断も詳らかとするには至らなかった。

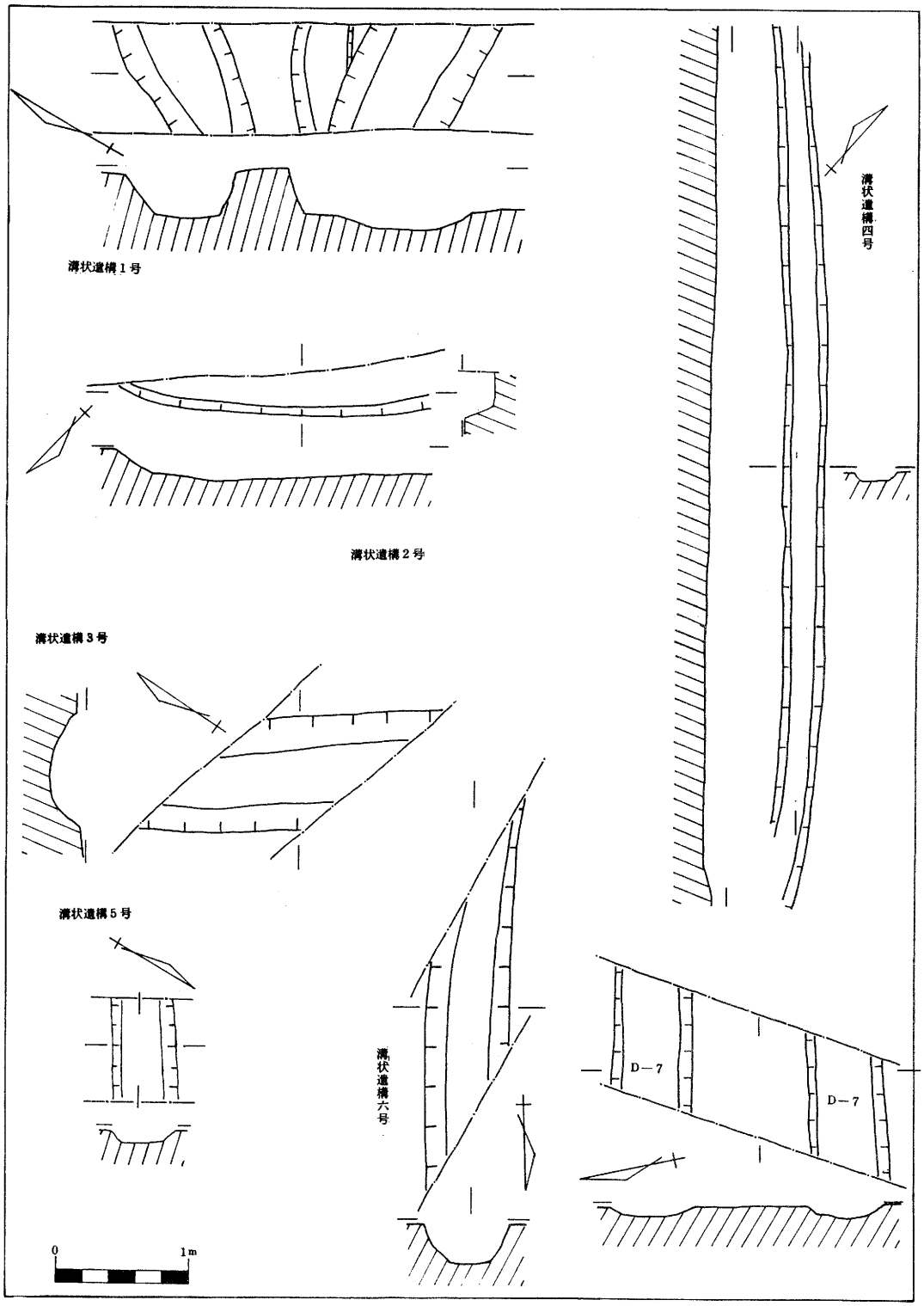
## 第６図　遺構実測図(1)



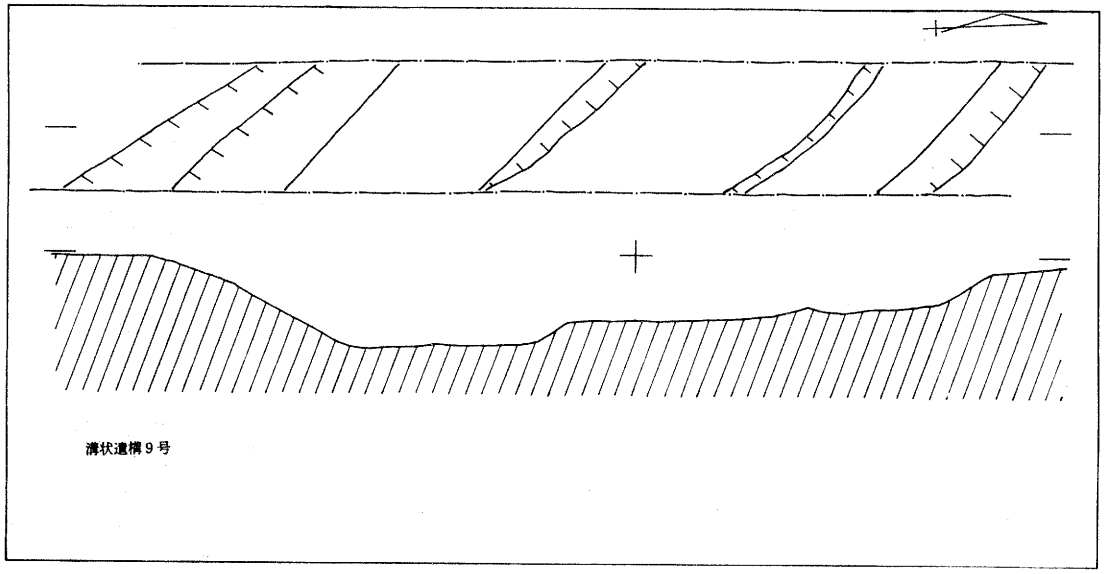
## 第６図　遺構実測図(2)



## 第７図　溝状遺構実測図(1)

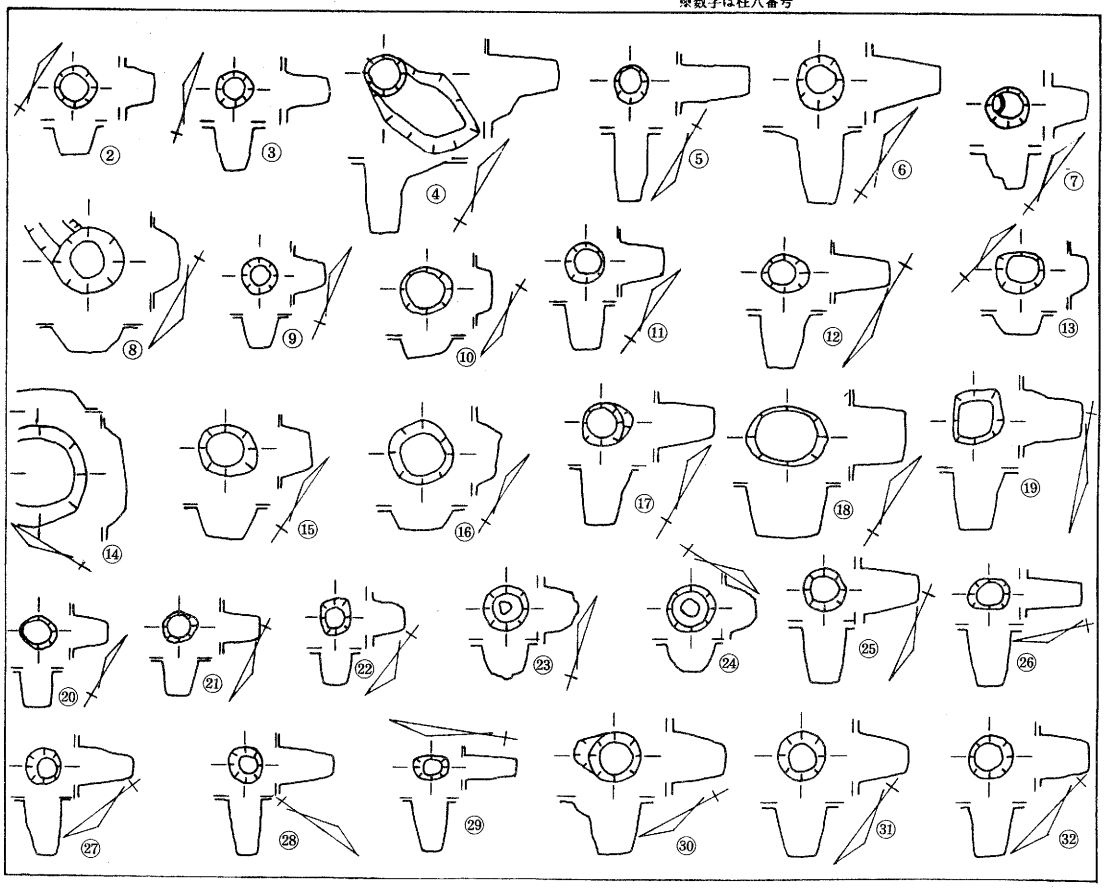


第７図(2)




第８図　柱穴（ピット）実測図

※数字は柱穴番号



## 2．遺　　物

出土遺物は、表１に示すとおり１２工区及び１３工区Ａに集中して出土し、総数は169点と調査地に比して少量であるが、縄文土器主体であって、器種は深鉢の占める比率が大である。

これらはまた、すべて完形もしくは完形に近い遺物は石器を除いて皆無であり、極めて小片が多く、さらに遺構内出土遺物も少量は存在したものの、伴出遺物とするにはいたらなかった。

石器についても、１２工区及び１３工区Ａに集中し、他は１３工区Ｂに石錘3点が出土しているだけである。

出土遺物の内訳は、縄文土器１２６点、土師器3点、須恵器2点、陶磁器4点、古銭1点、石器３３点となっている。

### (1)縄文土器（第9図1～2）

縄文土器は、１２工区及び１３工区Ａに集中して出土し、他は１４工区Ｂの最終調査地からわずか2点が出土したのみである。

図番号①～㉟は、大半が早期の貝殻条痕文土器系前平式土器であり、他は条痕文を施こしてはいるが、風化の為確認するに至らず、無文の土器も縄文早期の遺物である。

①は、深鉢の口縁部残片で、胴部はゆるく内湾し口縁近くで外反する。口縁部に径0.6㎝の穿孔1つが確認される。

②は、①と同様の口縁部残片で、胴部がわずかに内湾して立ち上がる、やゝ角張った口縁を有する。口縁部に径0.5㎝の穿孔が確認される。

③は、深鉢と推定される口縁部の残片で、外反する立ち上がりを見せ、丸味を帯びた円頭口縁である。

④は、深鉢上部のクビレ部と推定され、内面に陵が認められ外反して立ち上がっている。

⑤・⑥は、深鉢の胴部残片で、ともにゆるく内湾して立ち上がる。⑦は深鉢の胴部残片であるが、上端はクビレ部と推察され、内湾気味に立ち上がり上部でわずかに外反する。

⑧は、深鉢胴部の下方残片で、大きく内湾した立ち上がりである。

⑨～⑮は、深鉢と推察される胴部残片であり、文様は以上①から⑮までのすべてが貝

殻条痕文の土器である。

⑯は、深鉢口縁部の残片で、数条の条痕文が施文され、外反した立ち上がりを見せる円頭口縁のものである。

⑰は、②と同様角張った口縁を有し胴部はわずかに内湾している。施文は条痕文がわずかに認められるも、風化の為確認するには至らない。

⑱～㉓は、深鉢胴部の残片と推察される。⑱・㉑は無文土器であり、⑲・⑳・㉒・㉓は、わずかな条痕文が認められるが風化し確認できない。

㉔は、深鉢底部から立ち上がった胴部残片で、内面は大きく凹んで内湾し、外面は風化がひどく、表面も欠けて施文・無文も確認できない。

㉕は、深鉢底部の残片で、平底の一部を残して立ち上がる。外面は㉔と同様風化し、表面が欠け施文等は確認できないが、内面は大きく内湾して立ち上がる。

図番号⑯～㉕及び㉖～㉟は、①～⑮と分数された格好となったが、同一の縄文土器であり、内㉖～㉟は表２縄文土器計測表に示すとおりである。

器種も同様深鉢と推察され、大半が条痕文の施文が残されるが、外面が風化し鮮明でないものが多い。よって本項では割愛する。

以上３５点を登載したが、他の９１点は類似し小片でもあって省略した。器種については、一応深鉢と記したが、小片という事で決しがたく、深鉢としたものが含まれる。

さらにこれらの土器は、すべての内面がナデ調整で胎土は良好、１～３ミリ程度の粒子と雲母を含んだ遺物である。

### (2)土師器・須恵器（第１０図）

土師器は、男狭穂塚後方の周庭帯附近・１４工区Ａから３点出土（接合して２点）だけである。

㊱は、甕の胴部片で、わずかに内湾して立ち上がり、肉薄に仕上げられた口縁近くの遺物と考察され、外面に２条の突帯がめぐらされる。

器面調整は、粒子が浮き出る程風化している為鮮明ではない。胎土は荒く長砂粒を含む１～３ミリの粒子を多く含んでいる。

㊲は、㊱と同様甕の胴部片で、下方が大きく上半がゆるく内湾して立ち上がり、底部近くの遺物と考察される。

器形は肉薄に仕上げられているが、器面調整は粒子が浮き出る程風化しているため鮮明ではない。

須恵器は、表１に示すとおり１３工区Ａに２点（接合）出土しているだけである。

器種は、肉薄の甕の片で法量計測はできない。器面調整は、ヘラ調整後に外面がヨコメ・タテメのハケメ調整痕が残される。内面はヨコメのハケメ調整、内外面とも釉が施こされている。

### ⑶石　器（第１２図１～３）

石器は、表１に示すとおり１２工区及び１３工区Ａに集中し、他は１３工区Ｂに石錘３点が出土しただけで、総数は３３点である。

図番号㊹は、１３工区Ａの散乱する焼石に混じて出土した剥片石器である。石材は頁岩である。

㊺は、１２工区の焼石に混じて出土した敲石である。法量は、長軸13.0㎝、短軸１1.9㎝、厚さ 6.1㎝のもので、略円形を呈した砂岩製のものである。

㊻は、打製石斧で１３工区Ａから出土している。石材は頁岩製でクビレ部近くで折損した頭部の残片である。

石鏃は、㊼が１２工区、㊽・㊾が１３工区Ａからと３点、いづれも焼石に混じて出土している。

㊼は、長さ 3.2㎝、二等辺三角形の形容で基部は凹型、石材は詳らかでなく、突出した基部の片方は折損する。

㊽は、長さ1.6㎝、㊼同様二等辺三角形に類する形状で基部は凹型、石材は黒曜石である。

㊾は、尖頭が欠損し推定長は 1.9㎝。㊼と同様二等辺三角形に類する。基部は凹型で石材は頁岩製である。

石錘は、１２工区に１点、１３工区Ａに１１点、１３工区Ｂに３点と計１５点が出土している。㊿～(61)は内１２点を抽出したもので、他の３点も大差のない遺物である。

１２点の石錘については、表６に法量等の計測表として示している。

以上、遺構と遺物について簡略に述べてきたが、遺構は、方形土坑・円形土坑並びに溝状遺構や柱穴が、調査地の略全域に検出されたものの、特に伴出した遺物を認めるにはいたらなかった。

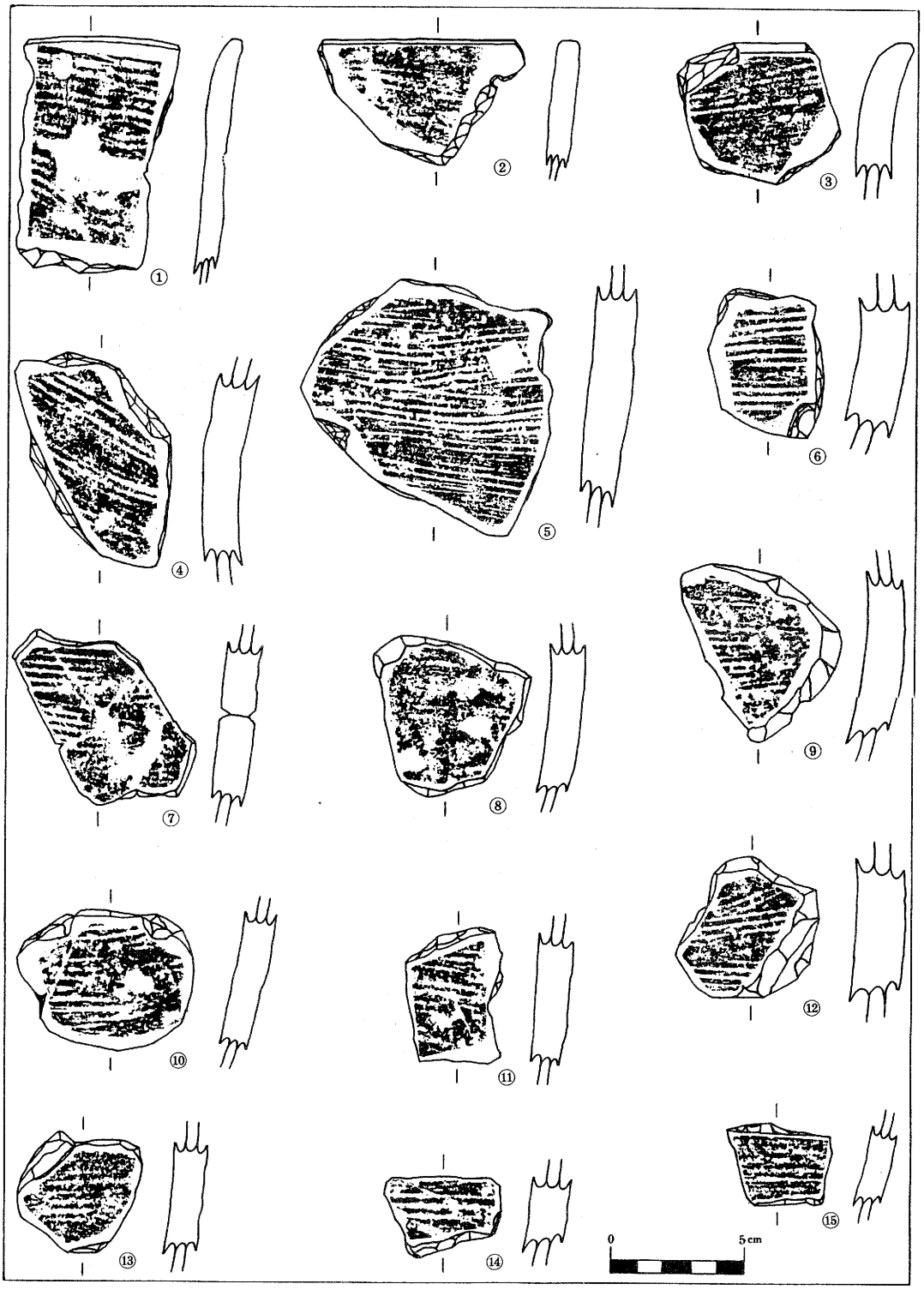
これらの中で、円形土坑の１号・２号は、西都原古墳群の消滅した古墳の周溝とも想定され、さらに方形土坑は、住居跡の一隅と考察されるが確認するにはいたらなかった。

遺物については、出土遺物総数１６９点中縄文土器が１２６点と主体をなすも、弥生土器が皆無、土師器・須恵器が極少という出土状況であった。

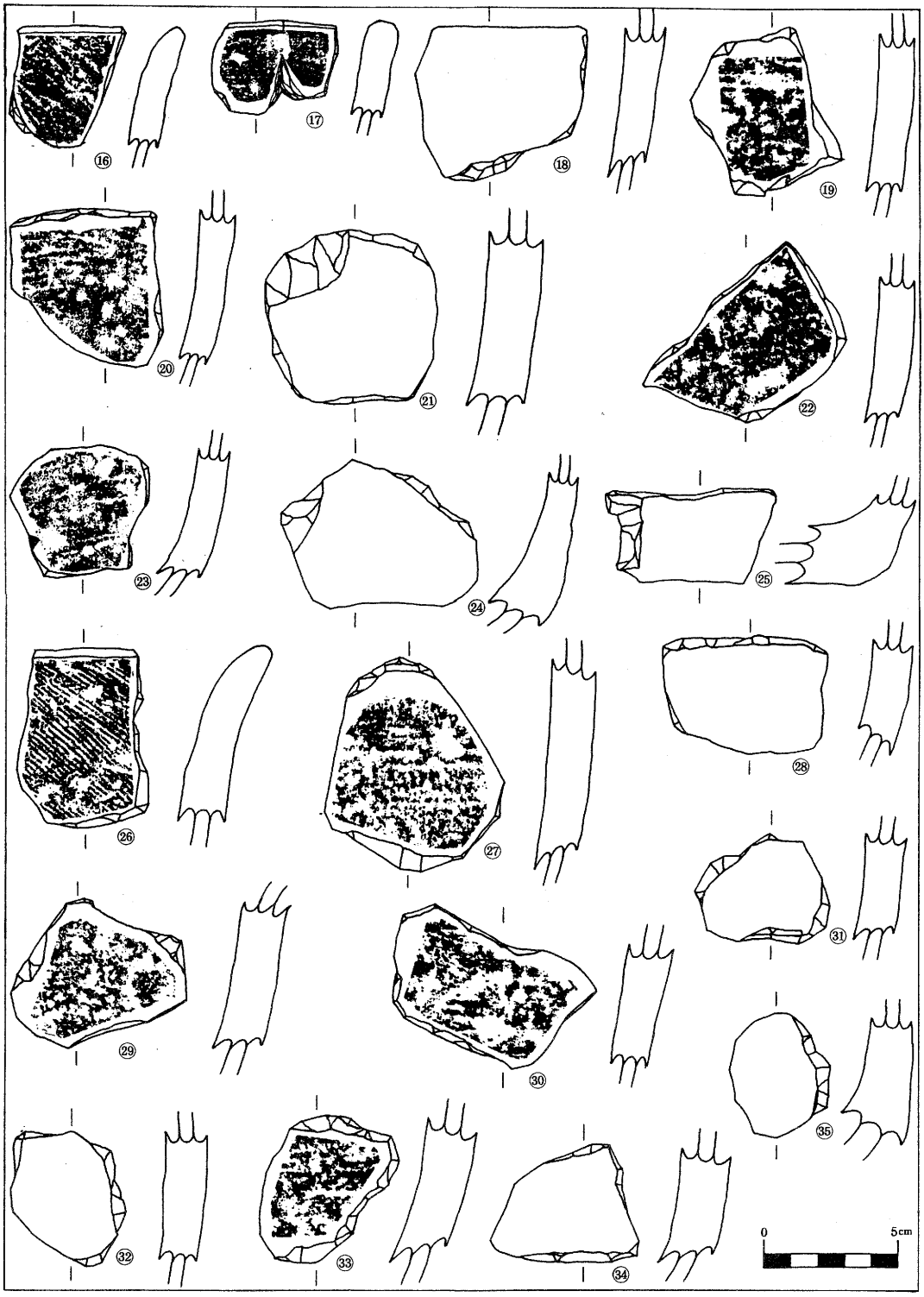
しかし、遺構の全容も確認されず、遺物も調査地に比しては極少であったといえるが、特筆するものとして、貝殻条痕文土器が出土したことは、西都原台地上に古墳群が形成される以前の集落形成究明に、今後の資料として提供され貢献するものと思われる。

さらに、本調査によって得た資料は、周辺地域の今後の調査時にも貴重な参考資料となる遺構と遺物であったということができる。

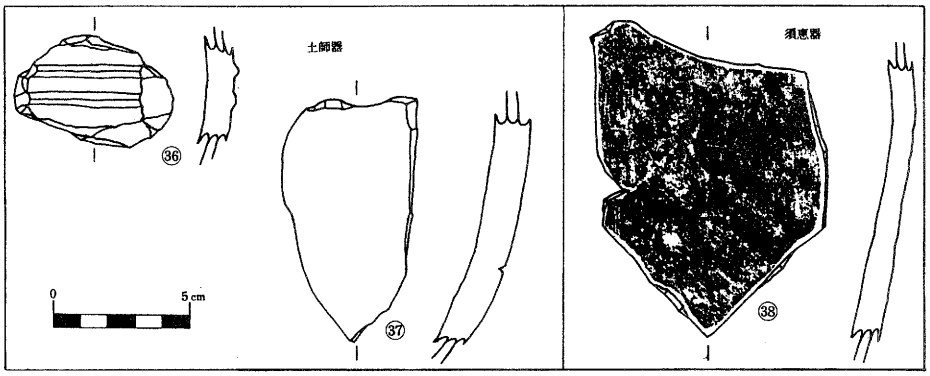
第９図　出土遺物実測図(縄文土器１)



第９図　縄文土器(2)

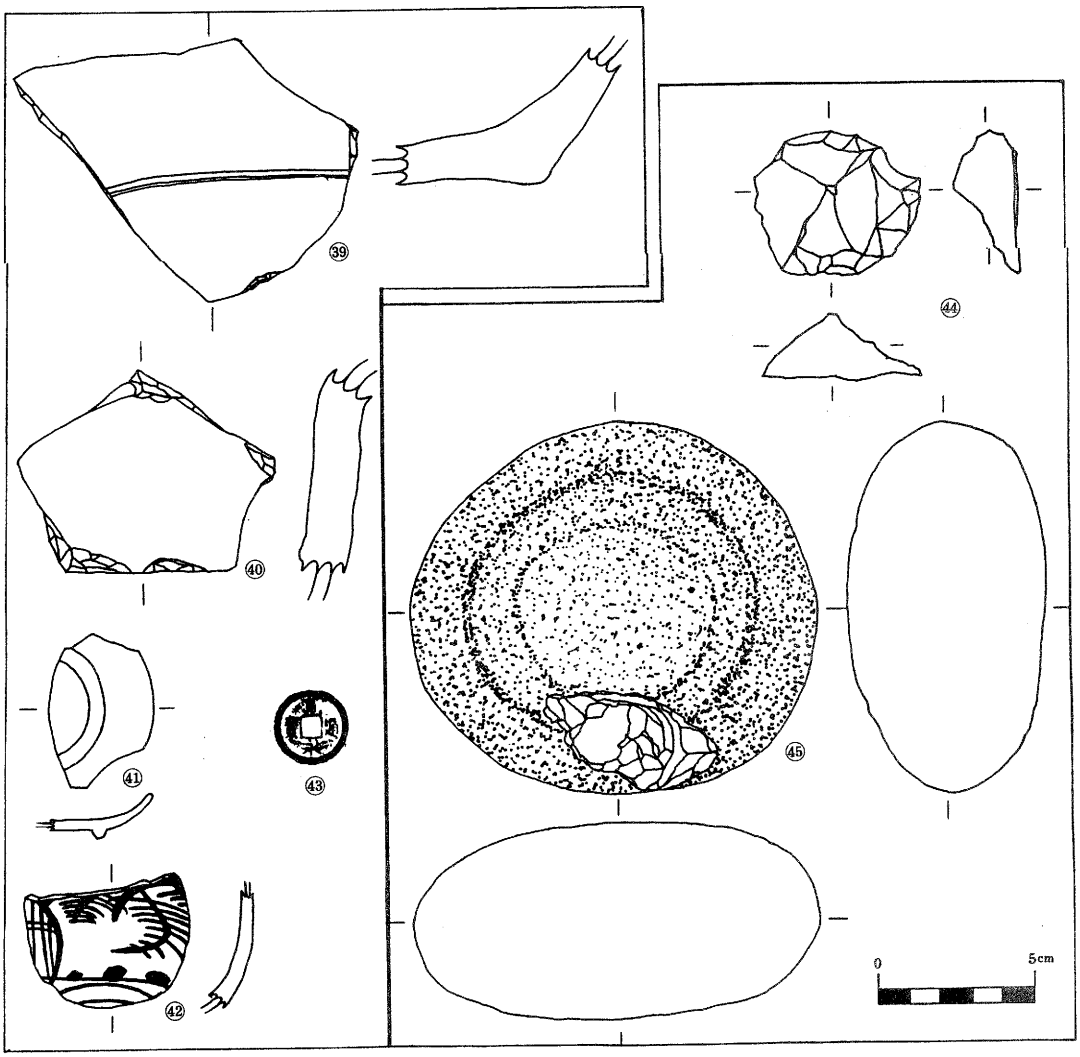


第１０図　出土遺物実測図（土師器．須恵器）

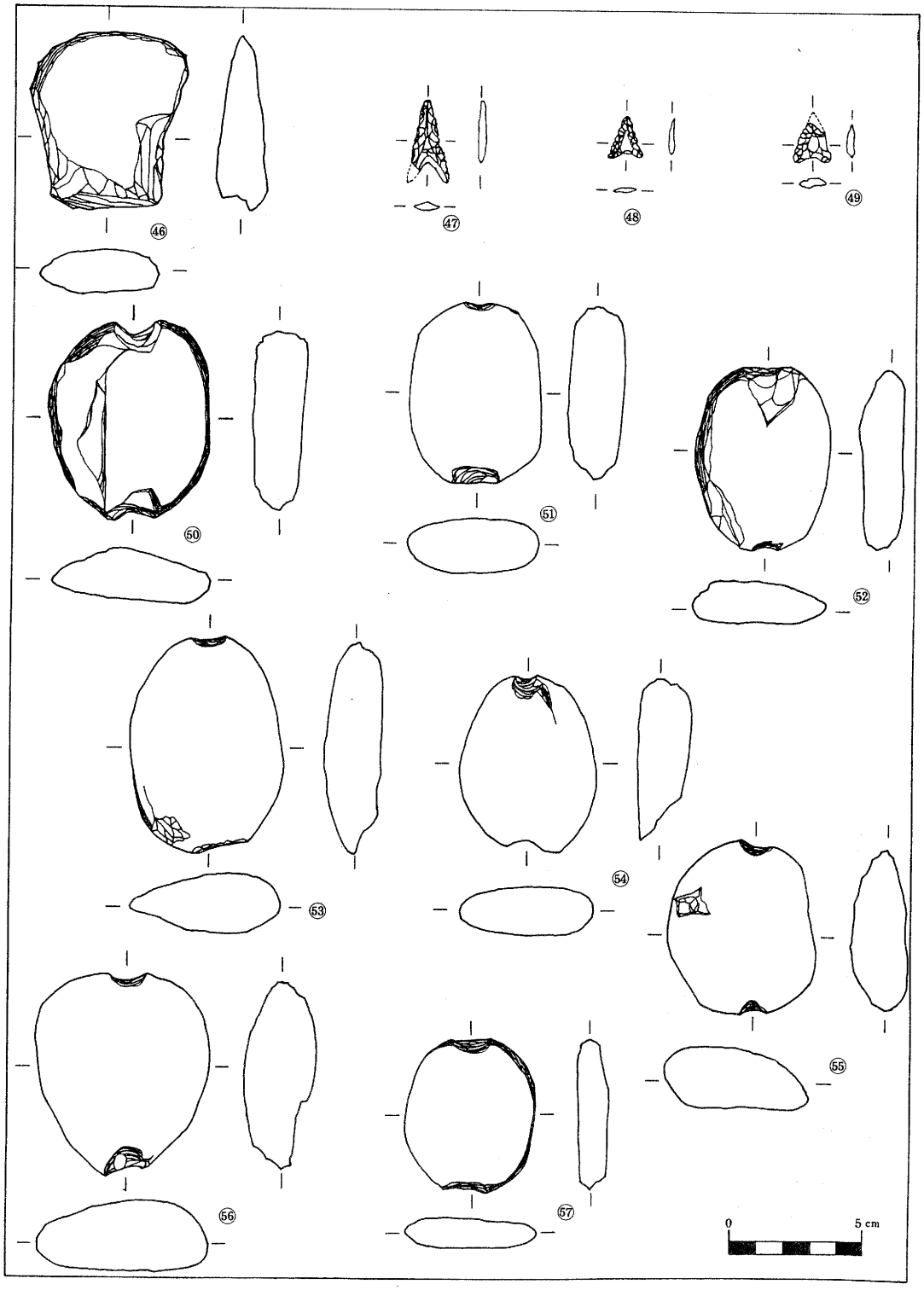



第１１図　出土遺物実測図（陶磁器．古銭）

第１２図　出土遺物実測図（石器１）



第１２図　石　器(2)



第１２図　石　器(3)

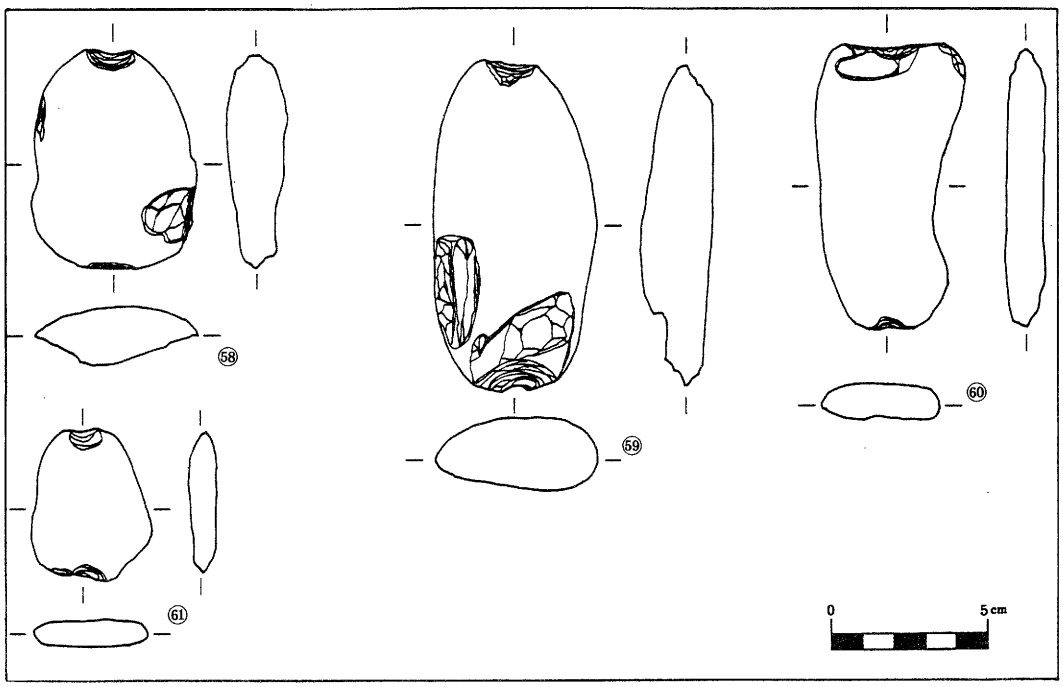


表1

## 出土遺物一覧表

| 出土地 / 遺物名 | 12工区 | 13工区A | 13工区B | 14工区A | 14工区B | 計 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 縄文土器 | 70 | 54 | | | 2 | 126 | 貝殻条痕文多し |
| 土師器 | | | | 3 | | 3 | |
| 須恵器 | | 2 | | | | 2 | |
| 石斧 | | 1 | | | | 1 | 頭部片 |
| 石鏃 | 1 | 2 | | | | 3 | |
| 敲石 | 1 | | | | | 1 | |
| 剥片 | | 1 | | | | 1 | |
| フレイク | 10 | 2 | | | | 12 | |
| 石錘 | 1 | 11 | 3 | | | 15 | |
| 染付 | | 2 | | | | 2 | |
| 陶器 | | | 2 | | | 2 | |
| 古銭 | | | | | 1 | 1 | 寛永通宝 |
| 計 | 83 | 75 | 5 | 3 | 3 | 169 | |

# 出土遺物計測表

表2　　縄文土器計測表(1)

| 図番号 | 品種 | 法量 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 出土地 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 深鉢 | | 外・明褐灰<br>内・灰白 | こまかい・雲母含む<br>1ミリ程の粒子 | 良好 | 12工区 | 口縁部片・口縁近くに径0.6センチの穿孔<br>貝殻条痕文 |
| 2 | 〃 | | 外・にぶい橙<br>内・橙 | 少し荒い・雲母含む<br>1～2ミリの粒子 | 良好 | 〃 | 口縁部片・貝殻条痕文<br>口縁近くに径0.5センチの孔 |
| 3 | 〃 | | 外・明褐灰<br>内・にぶい橙 | 少し荒い・雲母含む<br>小粒子 | 良好 | 13工区A | 口縁部片<br>貝殻条痕文 |
| 4 | 〃 | | 外・にぶい褐<br>内・にぶい橙 | こまかい・雲母含む<br>小粒子 | やゝ良好 | 12工区 | 胴部片<br>貝殻条痕文 |
| 5 | 〃 | | 外・浅黄橙<br>内・にぶい橙 | こまかい・雲母含む<br>1～2ミリの粒子 | 良好 | 〃 | 胴部片・貝殻条痕文<br>外側の一部に煤付着 |
| 6 | 〃 | | 外・にぶい橙<br>内・灰白 | こまかい・雲母含む<br>小粒子 | 良好 | 〃 | 胴部片<br>貝殻条痕文 |
| 7 | 〃 | | 外・にぶい橙<br>内・明褐灰 | 少し荒い・雲母含む<br>1～2ミリ粒子 | やゝ良好 | 13工区A | 口縁近くの胴部片<br>貝殻条痕文 |
| 8 | 〃 | | 外・橙<br>内・褐灰 | 少し荒い・雲母含む<br>1～2ミリ粒子 | やゝあまい | 12工区 | 底部近くの胴部片<br>貝殻条痕文 |
| 9 | 〃 | | 外・にぶい橙<br>内・淡橙 | 荒い・雲母含む<br>1～2ミリ粒子 | やゝあまい | 〃 | 胴部片<br>貝殻条痕文 |
| 10 | 〃 | | 外・にぶい橙<br>内・黒褐 | 少し荒い・雲母含む<br>小粒子 | やゝあまい | 13工区A | 同上 |
| 11 | 〃 | | 外・橙<br>内・褐灰 | こまかい・雲母含む<br>小粒子 | やゝ良好 | 〃 | 同上 |
| 12 | 〃 | | 外・明赤褐<br>内・同 | 荒い・雲母含む<br>小粒子 | やゝあまい | 12工区 | 同上 |
| 13 | 〃 | | 外・橙<br>内・明褐灰 | 少し荒い・雲母含む<br>1～2ミリ粒子 | やゝ良好 | 〃 | 同上 |
| 14 | 〃 | | 外・褐<br>内・にぶい橙 | 少し荒い・雲母含む<br>1～2ミリ粒子 | やゝ良好 | 13工区A | 同上 |
| 15 | 〃 | | 外・にぶい褐<br>内・にぶい橙 | 少し荒い・雲母含む<br>1～2ミリ粒子 | 良好 | 〃 | 同上 |
| 16 | 〃 | | 外・灰褐<br>内・にぶい褐 | こまかい・雲母含む<br>小粒子 | 良好 | 12工区 | 口縁部片<br>貝殻条痕文 |
| 17 | 〃 | | 外・褐灰<br>内・にぶい橙 | こまかい・雲母含む<br>小粒子 | 良好 | 13工区A | 口縁部片<br>風化し不鮮明の貝殻条痕文 |

| 図番号 | 器種 | 法量 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 出土地 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 18 | 深鉢 | | 外・浅黄橙<br>内・明褐灰 | こまかい・雲母含む<br>小粒子 | やゝあまい | １２工区 | 胴部片<br>風化するも、かすかな条痕文を有する |
| 19 | 〃 | | 外・にぶい橙<br>内・同 | 少し荒い・雲母含む<br>小粒子 | やゝあまい | １３工区Ａ | 胴部片<br>不鮮明であるが条痕文あり |
| 20 | 〃 | | 外・浅黄橙<br>内・褐灰 | こまかい・雲母含む<br>小粒子 | やゝ良好 | １２工区 | 胴部片<br>風化しているが貝殻条痕文 |
| 21 | 〃 | | 外・浅黄橙<br>内・明褐灰 | こまかい・雲母含む<br>小粒子 | 良好 | 〃 | 胴部片<br>無文 |
| 22 | 〃 | | 外・にぶい橙<br>内・浅黄橙 | 少し荒い・雲母含む<br>１～２ジリ粒子 | やゝ良好 | 〃 | 胴部片<br>かすかな条痕文を有する |
| 23 | 〃 | | 外・橙<br>内・にぶい橙 | 少し荒い・雲母含む<br>１～３ミリ粒子 | やゝ良好 | １３工区Ａ | 底部近くの胴部片<br>風化するも条痕文を有する |
| 24 | 〃 | | 外・にぶい橙<br>内・同 | 荒い・雲母含む<br>１～２ミリ粒子 | やゝあまい | 〃 | 底部近くの胴部片<br>風化の為表面が不鮮明 |
| 25 | 〃 | | 外・浅黄橙<br>内・にぶい橙 | 少し荒い・雲母含む<br>小粒子 | やゝあまい | 〃 | 底部片<br>表面（外側）くずれている |
| 26 | 〃 | | 外・にぶい橙<br>内・明褐灰 | 少し荒い・雲母含む<br>１～４ミリ粒子 | やゝ良好 | 〃 | 口縁部片・内側色調一部に橙<br>貝殻条痕文 |
| 27 | 〃 | | 外・橙<br>内・にぶい橙 | 少し荒い・雲母含む<br>１～３ミリ粒子 | やゝあまい | １２工区 | 胴部片・貝殻条痕文が風化し鮮明でない |
| 28 | 〃 | | 外・黄橙<br>内・明褐灰 | こまかい・雲母含む<br>小粒子 | やゝ良好 | 〃 | 口縁近くの胴部片<br>外面風化、内面ナデ |
| 29 | 〃 | | 外・にぶい橙<br>内・同 | あらい・雲母含む<br>１～２ミリ粒子 | やゝあまい | 〃 | 口縁近くの胴部片<br>条痕文がかすかに残存する |
| 30 | 〃 | | 外・浅黄橙<br>内・同 | 少し荒い・雲母含む<br>小粒子 | やゝあまい | 〃 | 胴部片<br>貝殻条痕文がわずかに残存する |
| 31 | 〃 | | 外・橙<br>内・にぶい橙 | 少し荒い・雲母含む<br>１～２ミリ粒子 | あまい | 〃 | 胴部片<br>条痕文が風化の為鮮明でない |
| 32 | 〃 | | 外・橙<br>内・明褐灰 | 少し荒い<br>１～２ミリ粒子 | あまい | 〃 | 胴部片<br>外面は風化して鮮明でない |
| 33 | 〃 | | 外・にぶい橙<br>内・同 | あらい<br>１～３ミリ粒子 | あまい | １３工区Ａ | 胴部片<br>条痕文がかすかに残存する |
| 34 | 〃 | | 外・橙<br>内・にぶい橙 | あらい<br>１～３ミリ粒子 | あまい | １２工区 | 胴部片（底部近く）<br>内外面風化し鮮明でない |
| 35 | 〃 | | 外・橙<br>内・にぶい橙 | あらい<br>１～３ミリ粒子 | あまい | 〃 | 底部近くの胴部片<br>内外面とも風化 |

表3　　土師器計測表

| 図番号 | 器種 | 法量 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 出土地 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 36 | 甕 | | 外・橙<br>内・浅黄橙 | あらい<br>1～3ミリ粒子 | あまい | 14工区A | 胴部片・2条の突帯をめぐらす<br>内外面とも回転ナデと思考 |
| 37 | 〃 | | 外・明褐<br>内・橙 | あらい<br>1～3ミリ粒子 | やゝあまい | 〃 | 底部近くの胴部片<br>内外面風化し粒子が浮上 |

表4　　須恵器計測表

| 図番号 | 器種 | 法量 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 出土地 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 38 | | | 外・暗灰黄<br>内・同 | こまかい<br>良質・1～3ミリ粒子 | 良好 | 13工区A | 胴部片<br>内外面ともハケナデ調整 |

表5　　陶磁器計測表

| 図番号 | 種別 | 品種 | 出土地 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 39 | 陶器 | 壷（推） | 13工区B | 底部片・底面は内湾して浮上し、端部は急曲して内湾気味に立ち上がる。外面にオリーブ黒の釉をかける。 |
| 40 | 〃 | 甕（推） | 〃 | 胴部片・胴は内湾して立ち上がり、上端は急に外反してクビレ部となる。外面淡黄・内面褐色の釉をかける。 |
| 41 | 染付 | 皿 | 13工区A | 口縁から高台までを残す片、胴は内湾して立ち上がり、徐々に薄くなる。内面は横・斜面の染 |
| 42 | 〃 | 碗 | 〃 | 胴部片・胴は内湾して立ち上がり上端がわずかに外反気味<br>肥前染付 |

表6

# 石　錘　計　測　表

単位：センチメートル

| 図番号 | 材　質 | 長軸径 | 短軸径 | 厚　さ | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 50 | 頁　岩 | 7.5 | 6.1 | 2.0 | 下面は略水平、表面は縦に１条の陵を有し、断面は三角形状 |
| 51 | 砂　岩 | 6.2 | 5.0 | 2.1 | カガリ部の打ち欠きが少ない |
| 52 | 頁　岩 | 7.0 | 5.1 | 1.7 | 片方の打ち欠きが少ない |
| 53 | 〃 | 8.1 | 5.4 | 2.2 | 下面の端部が欠損する |
| 54 | 〃 | 6.2 | 5.2 | 2.0 | 下面端部が大きく欠損する |
| 55 | 〃 | 6.4 | 5.4 | 2.4 | 片方の打ち欠きが小さい |
| 56 | 〃 | 7.7 | 6.6 | 2.6 | 下面の一部が欠損する |
| 57 | 砂　岩 | 5.8 | 5.9 | 1.2 | 下面の一部が欠損する |
| 58 | 頁　岩 | 7.1 | 5.3 | 1.8 | 下面は打ち欠いで調整される<br>片方の打ち欠きが少ない |
| 59 | 砂　岩 | 4.8 | 3.9 | 0.9 | 出土中最小のもの |
| 60 | 頁　岩 | 10.4 | 5.2 | 2.3 | 表面に２ケ所の欠損部がある |
| 61 | 砂　岩 | 7.0 | 5.5 | 1.3 | 概略くの字型の形容 |

# ま　と　め

このたび実施した丸山遺跡の発掘調査は、西都平野を流れる一ツ瀬川の水を西都原台地に揚水し、畑作営農の近代化を図るため、送水管の埋設に伴った事前調査であった。

しかし、調査の主眼地域は、丘陵台地の縁辺部に位置する１２工区及び１３工区Ａ調査地で、遺構の検出はやゝ期待に反する面もあったが、遺物として、縄文時代早期の貝殻条痕文を有する前平式土器が発見されたことは注目すべきことである。

発掘調査のすすんでいない西都市では、縄文土器片が各所の洪積層台地上から散見されるが、縄文時代の遺跡等として確認された例は極めて少ない。

西都原台地からは、過去に縄文早期の原口遺跡が検出されている。この遺跡は、丸山遺跡１２工区調査地から、同一台地の縁辺に沿って、南に約1,５００ｍ程しか離れていない位置にある。

調査は、昭和３２年５月に実施され、縄文時代早期の単独遺跡として、貝殻条痕文を有する縄文土器や石器等が出土している。

丸山遺跡の調査で、検出した遺跡に興味をそそぐのが円形土坑の１号・２号である。この遺跡は、西都原古墳群の北端第１３６号から約２０ｍしか離れていない近接地に在り、１号の推定径が約３０ｍ、２号の推定径が約２５ｍ前後の円形状となり、遺物が伴出しないことから推論となるが、古墳の周溝と考察することもできる。

また、１号・２号の遺構間が約１ｍと非常に近接することから、他にもこの周辺に古墳が群集していたと追想され、今後の調査を期待するところが大である。

遺構はすべて第Ⅲ層に検出されているが、さらに約２５～３０㎝掘り下げた層位に、１２工区及び１３工区Ａの東辺に集中して焼石が多量に検出された。

この層位からは、遺構の検出及び確認はされなかったが、原口遺跡と同様貝殻条痕文を有する縄文土器片が散乱する焼石に混じて１２６点出土した。

この数量は、本調査に於ける出土遺物数が１６９点で、主体をなすものが縄文土器ということになる。

皆無の弥生土器については１３工区Ａ調査地の南へ約５０ｍの位置に、１０数年前畑作中に同時代の壷が出土し、住居跡に伴う遺物としてこのたびの調査では、弥生時代の遺構と遺物出土を大きく期待したものであった。

土師器についても極少の3点、西都原の中心地男狭穂塚の後方周庭帯近くから出土しているだけ、さらに須恵器についても2点と、調査地に比して非常に少なく、皆無といってよい程の点数であった。

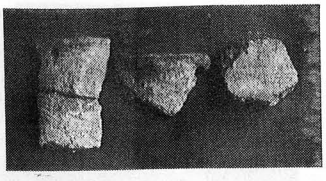
陶磁器及び古銭については、陶器2点、染付2点、古銭1点が出土しているが、これらは人の移動や耕作肥料等に混じて流入した遺物と考察される。

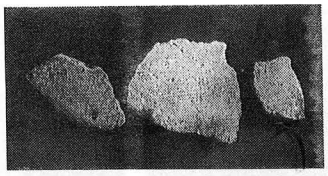
また、完形石鏃3点を含む石器の出土については、石錘の出土層が不安定で、他は第V層上の焼石に混じ、縄文土器とともに出土している。

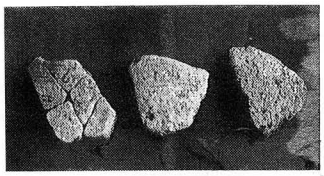
本調査が終り、遺物の総数は極少であったが、縄文時代早期の遺物が大半を占めていることは特に注目すべきことであり、今後とも丸山遺跡を含めた西都原台地の探究を進めなければならないし、縄文時代の西都原とその周辺に関しての今後の調査資料として、原口遺跡と同様大きく貢献するものと思われる。

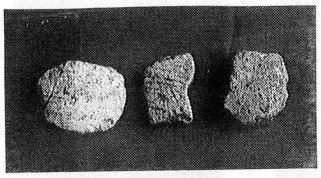
# 図　　版

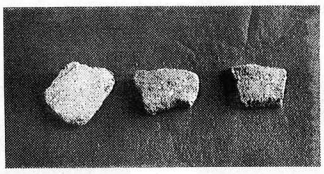
## 図版1　出　土　遺　物

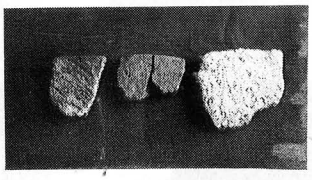

1－2－3

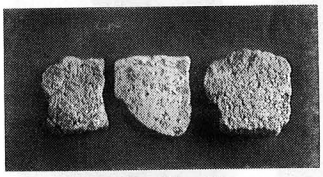

4－5－6

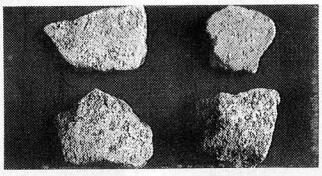

7－8－9

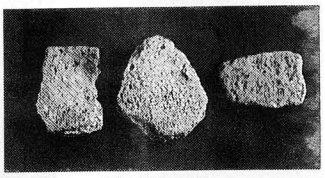

10－11－12

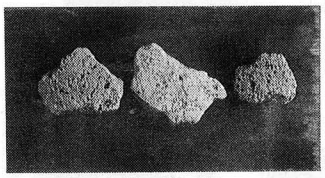

13－14－15

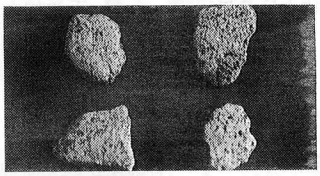

16－17－18

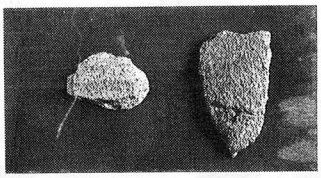

19－20－21

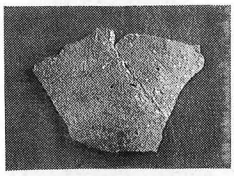

22－23－24－25

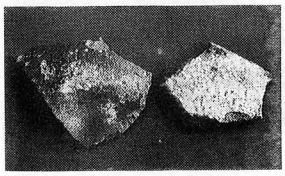

26－27－28

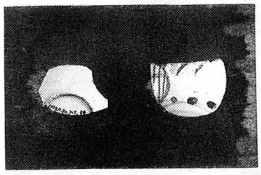

29－30－31

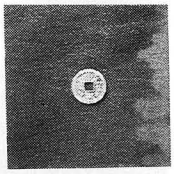

32－33－34－35

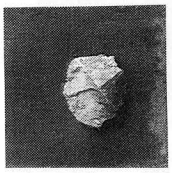

36－37

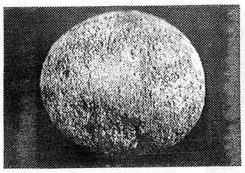

38

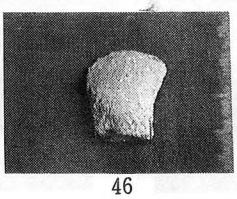

39－40

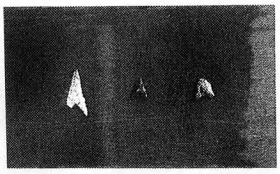

41－42

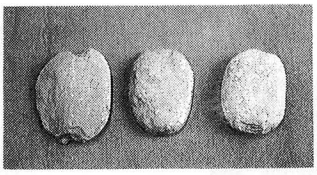

43


44


45


46

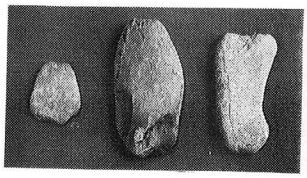

47－48－49


50－51－52

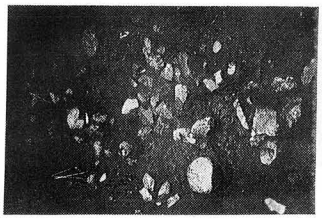
53－54－55

56－57－58

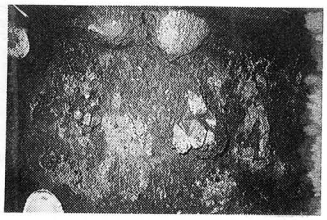
## 図版２



出土遺物　59－60－61



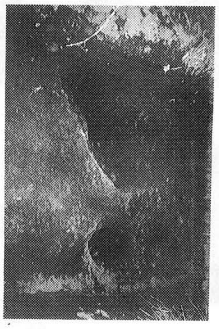
遺物の出土状況



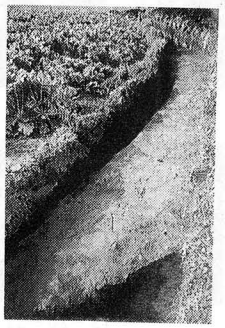
遺物の出土状況

方形状土抗１号

方形状土抗２号



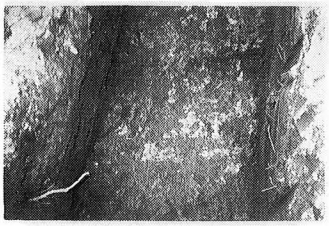
方形状土抗３号



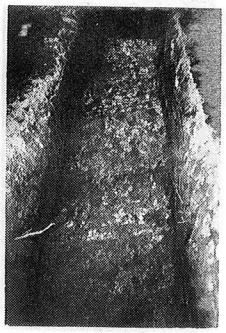
円形状土抗２号

方形状土抗１号

溝状遺構２号

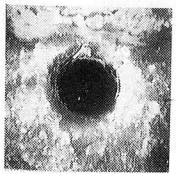


溝状遺構５号

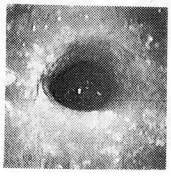


溝状遺構７号・８号

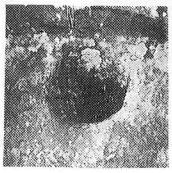
Ｐ－４



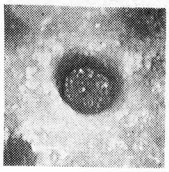
Ｐ－５



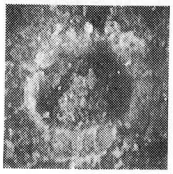
Ｐ－６



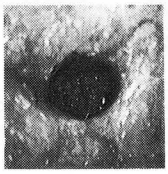
Ｐ－14



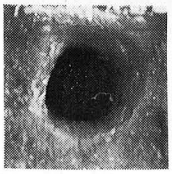
Ｐ－15



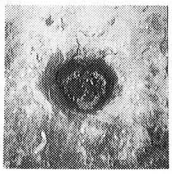
Ｐ－16



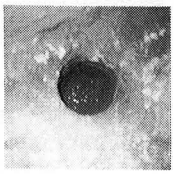
Ｐ－18



Ｐ－19

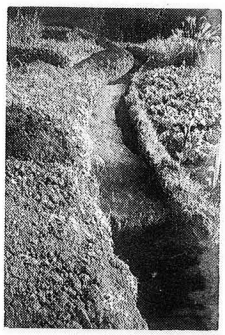


Ｐ－30

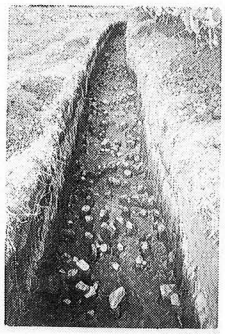


Ｐ－32

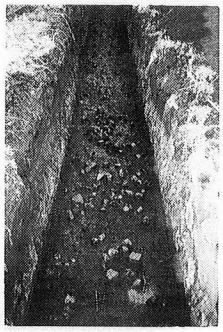
図版３



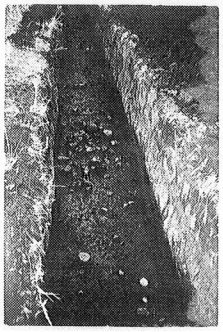
12工区調査地



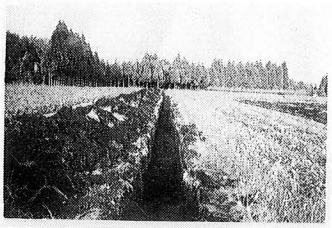
12工区調査地



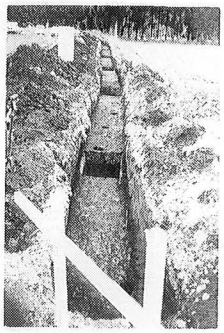
13工区Ａ調査地



13工区Ａ調査地

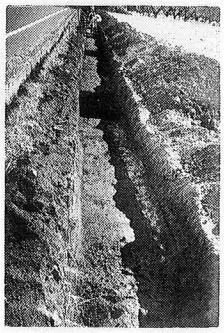


調査地東辺地

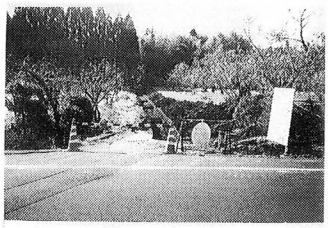


13工区Ａ最終地

13工区Ｂ調査地

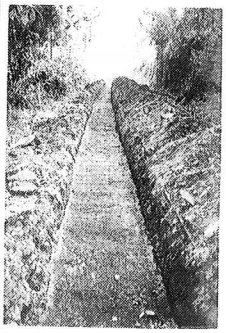


13工区Ｃ調査地



14工区Ａ調査地

14工区Ａ調査地



14工区Ｂ調査地

西都市 埋蔵文化財発掘調査報告書 第９集

発行年月日　平成２年３月３０日

編　　集　西都原古墳研究所

発　　行　西都市教育委員会

印　　刷　吉　永　印　刷